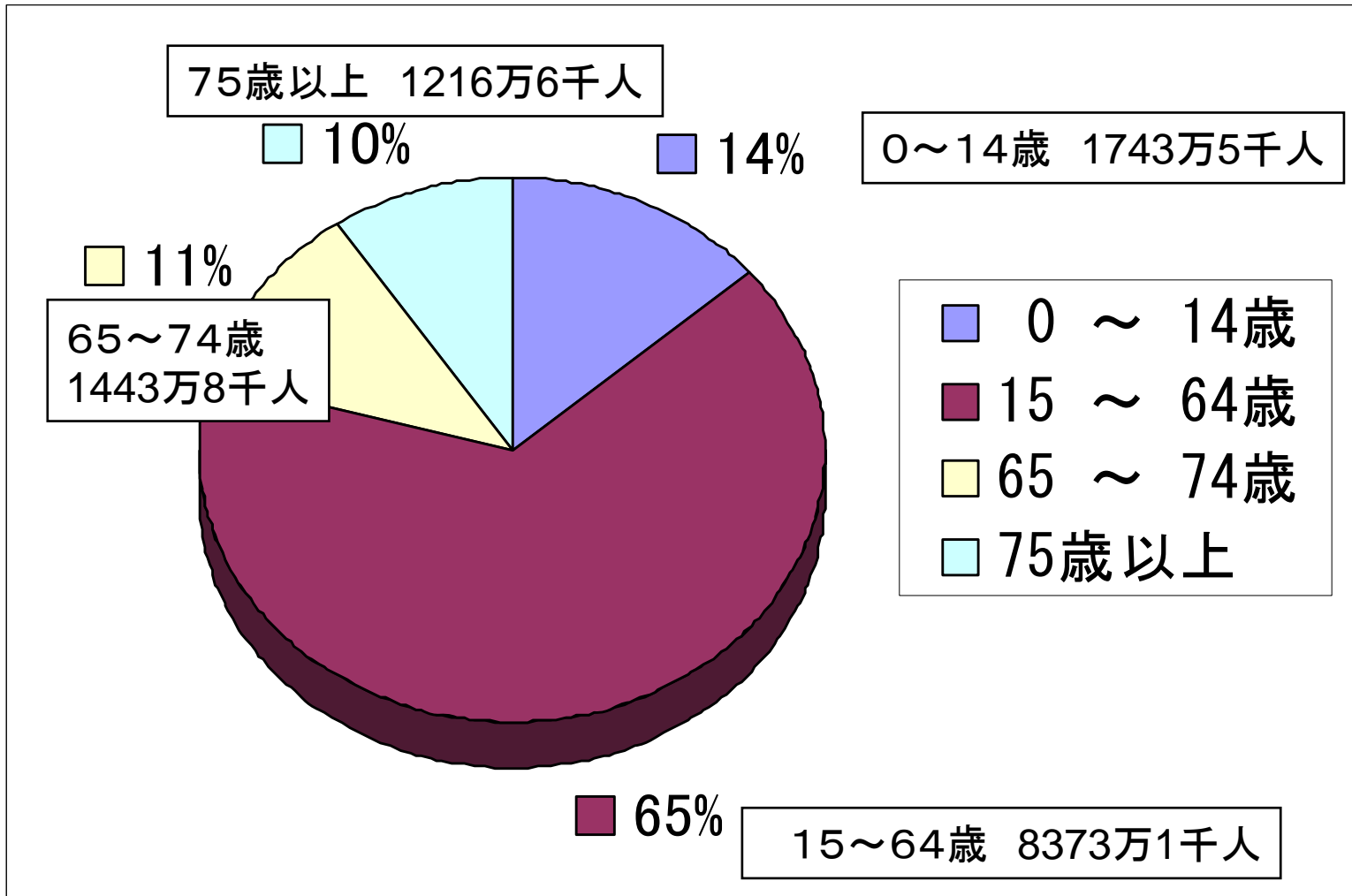


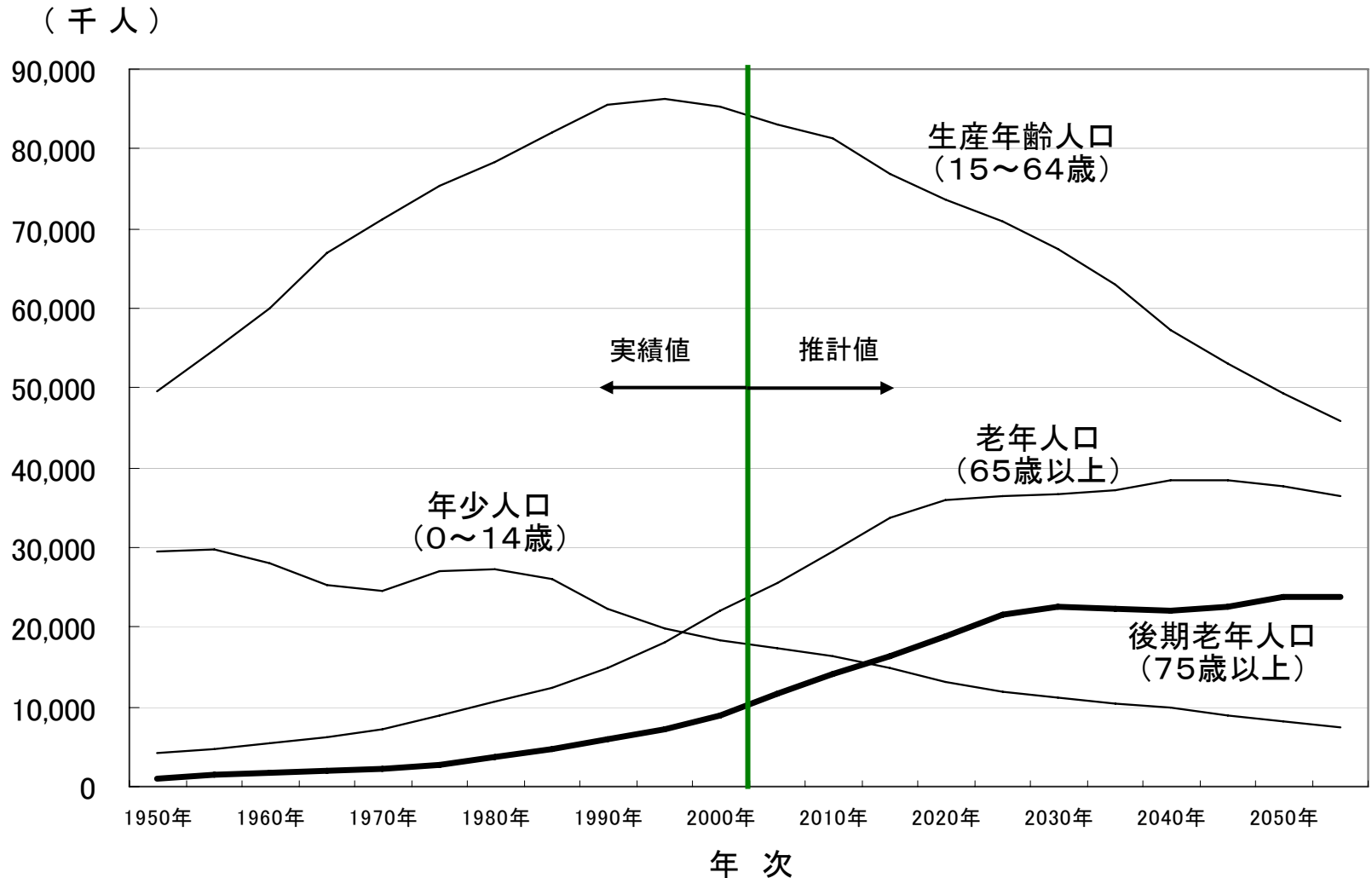
# 後期高齢者について

日本の総人口 1億2777万人  
うち75歳以上 1216万6千人



# 年齢区分別人口の推移

(平成18年12月推計: 国立社会保障・人口問題研究所)



出典) 2005年までは、「人口動態調査」

2010年以降は、「日本の将来推計人口(平成18年12月推計)」(出生中位・死亡中位)

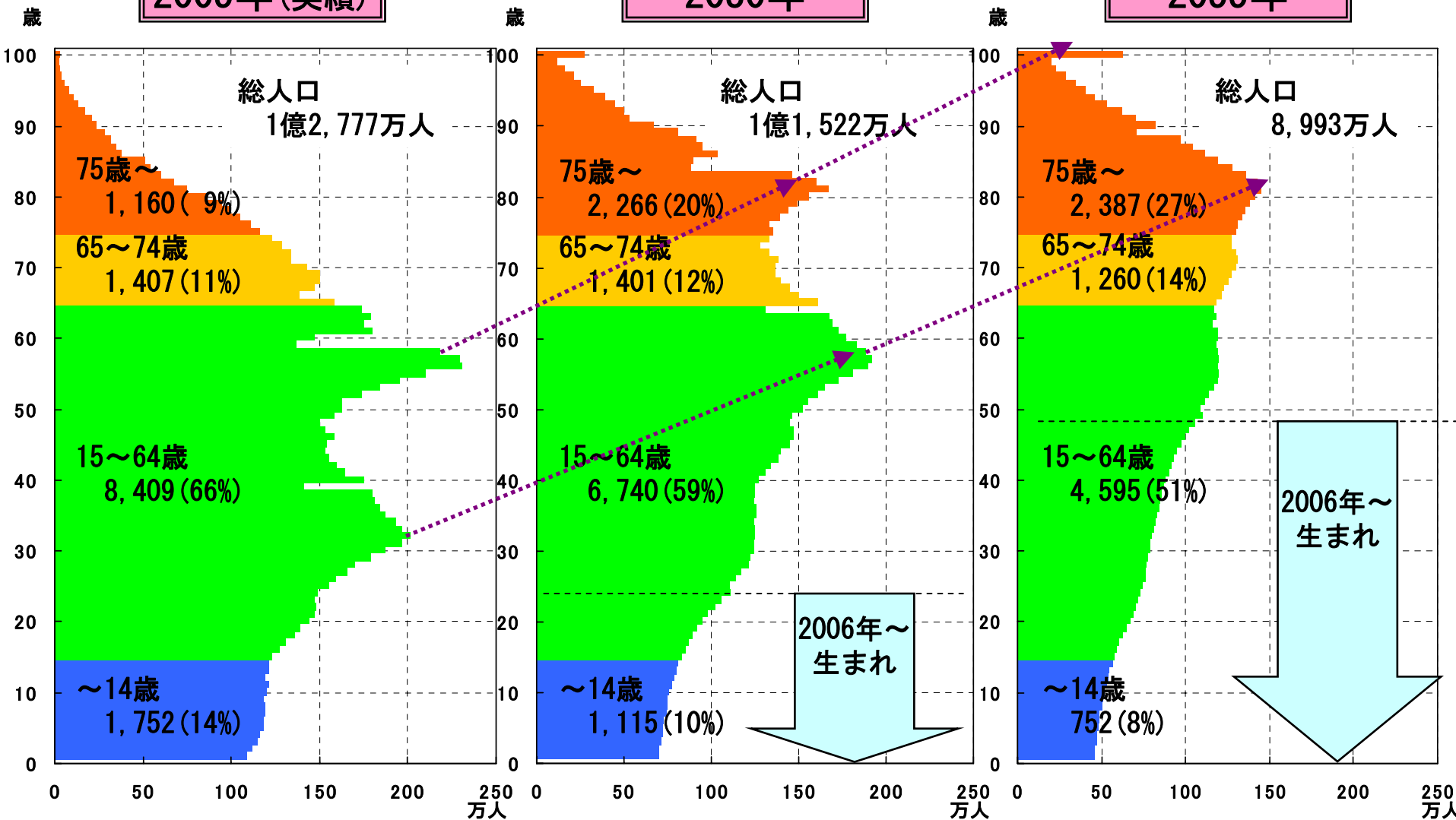
# 人口ピラミッドの変化(2005, 2030, 2055)

-平成18年中位推計-

2005年(実績)

2030年

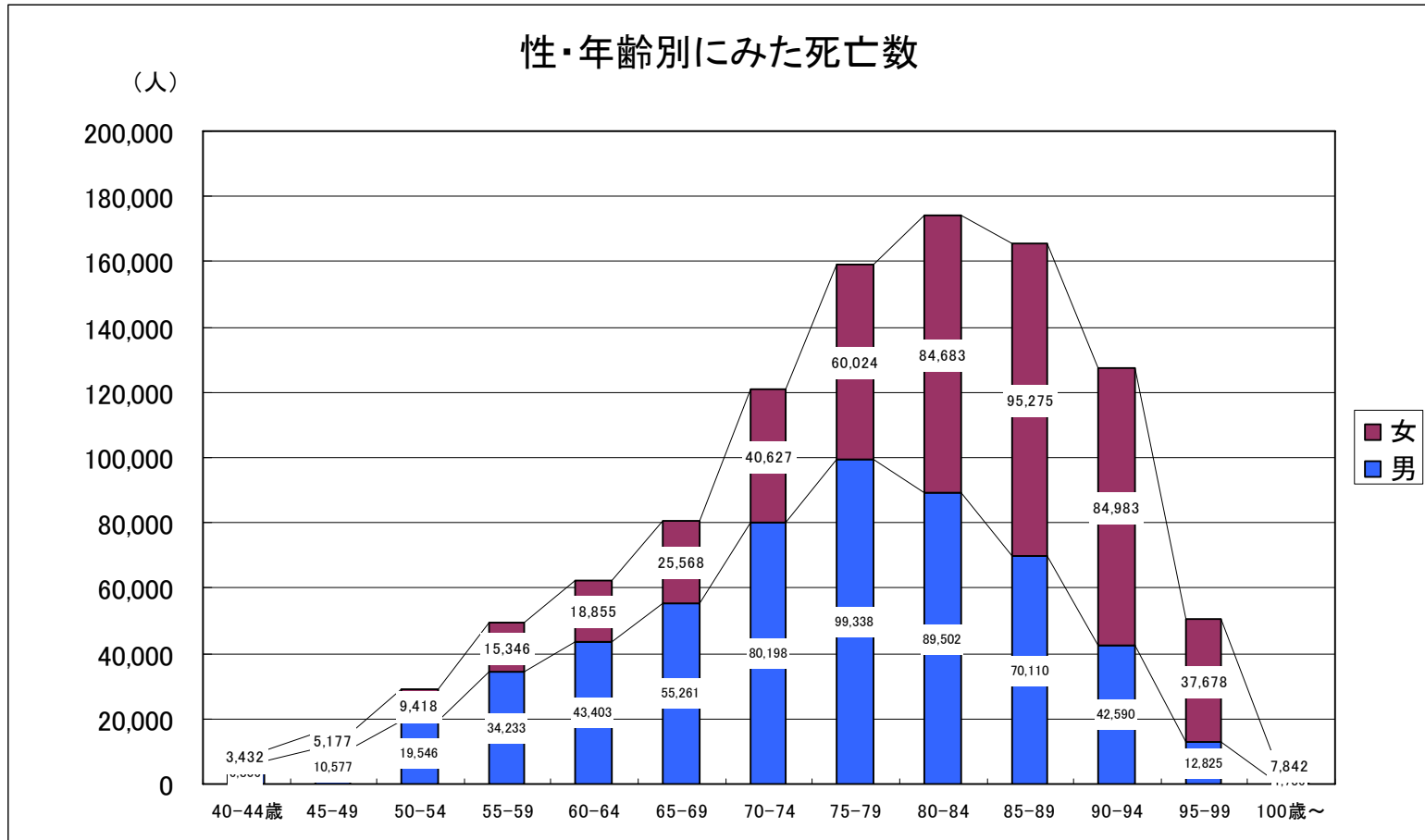
2055年



注: 2005年は国勢調査結果。総人口には年齢不詳人口を含むため、年齢階級別人口の合計と一致しない。

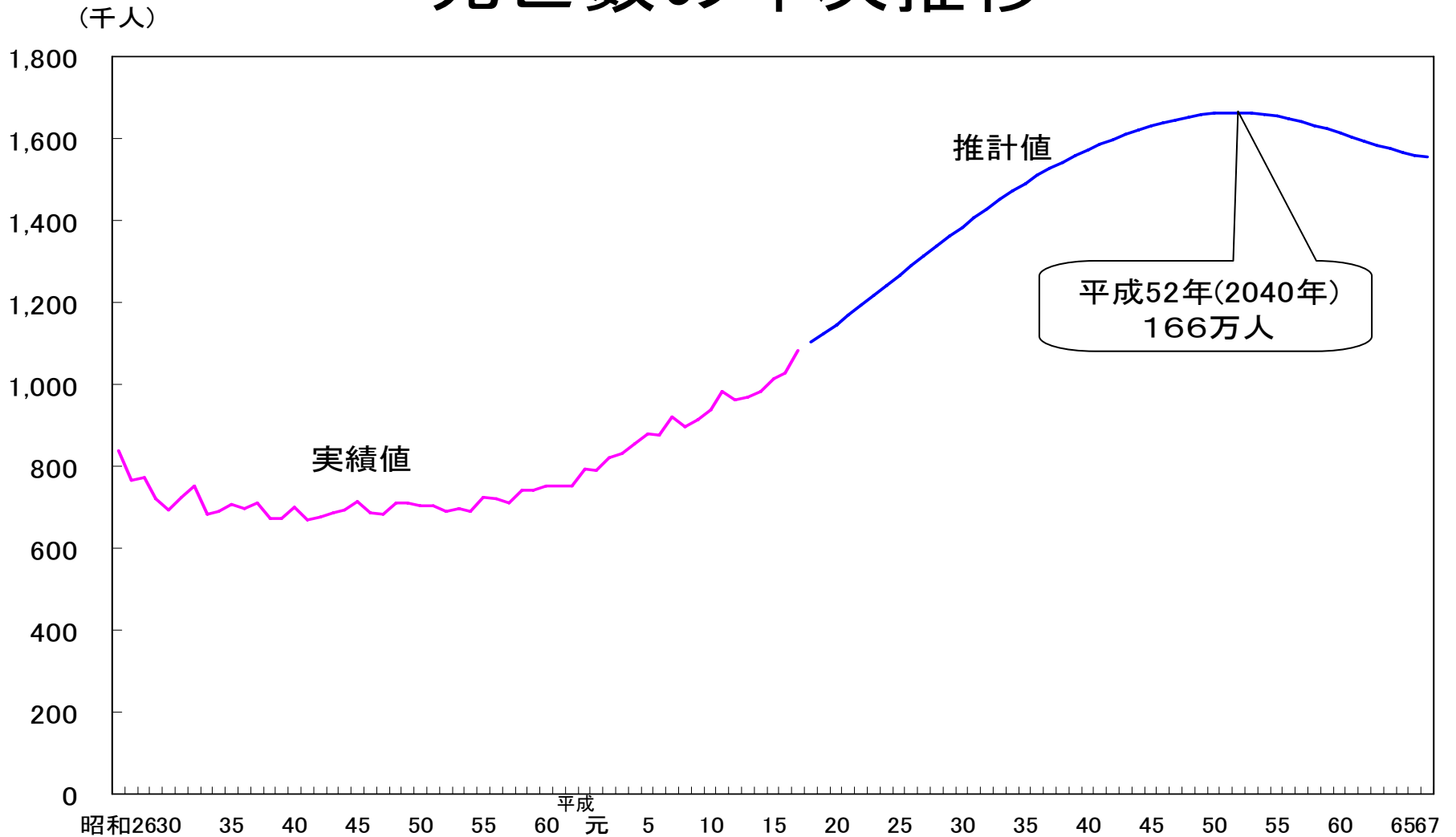
# 性・年齢階級別にみた死亡数

全体としては、80～84歳代で死亡する者が最多である。  
性別にみると、男性は75～79歳代、女性は85～89歳代が最多である。



出典) 人口動態調査 (平成17年)

# 死亡数の年次推移

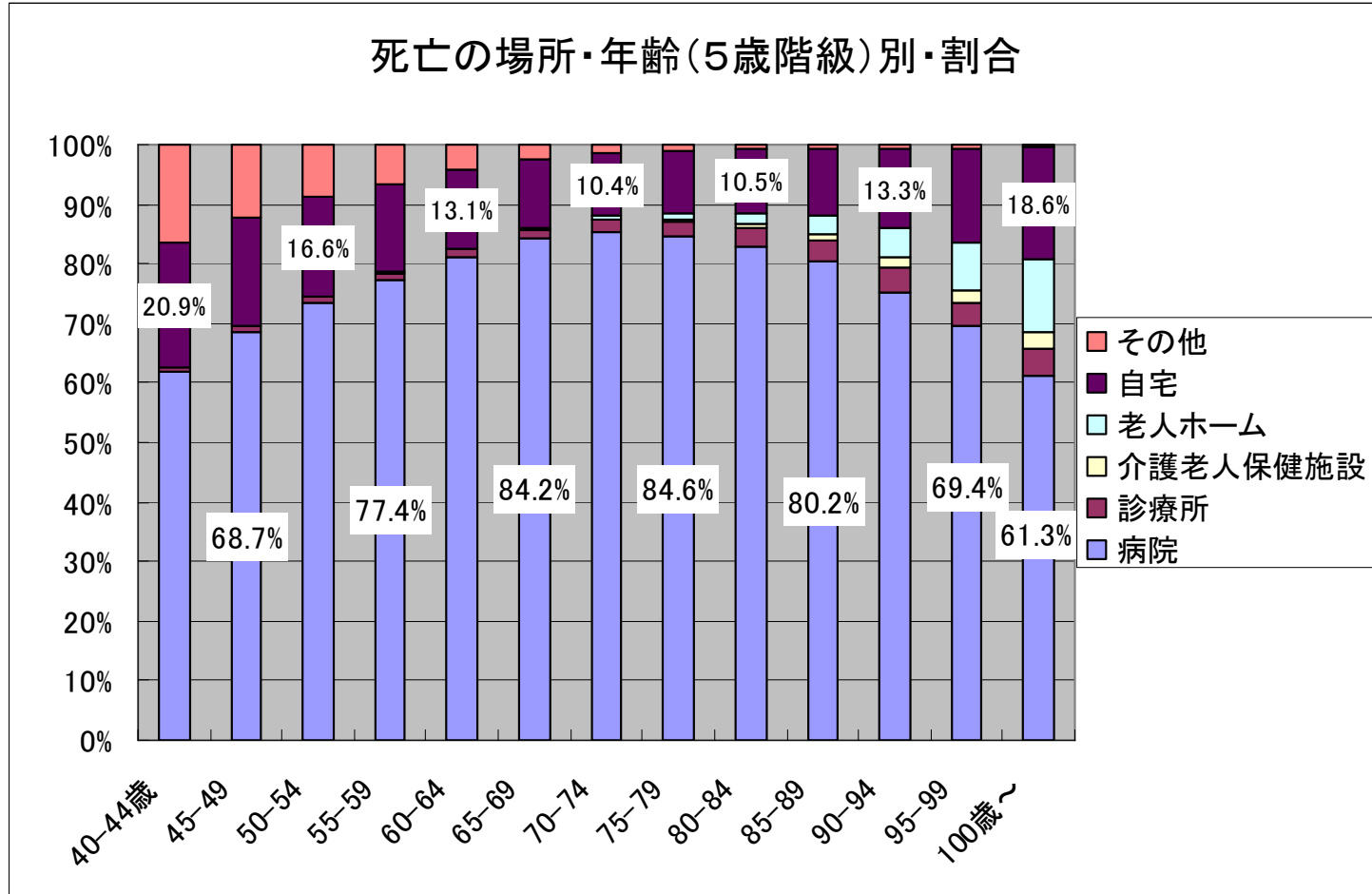


資料) 平成17年までは、人口動態調査

平成18年以降は、「日本の将来推計人口(平成18年12月推計)」(出生中位・死亡中位)

# 年齢階級別にみた死亡場所の割合

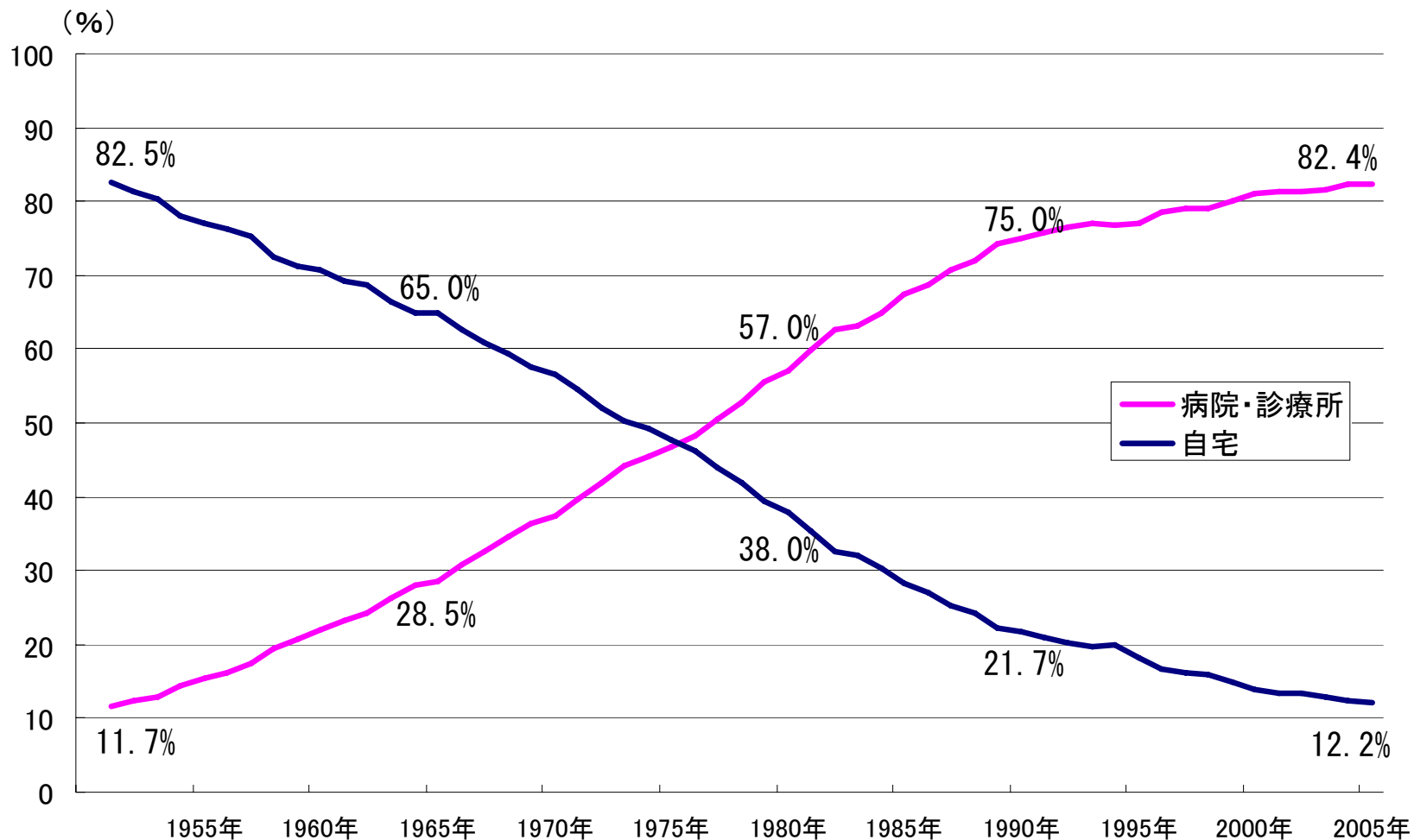
40～44歳代では、事故死等による「その他」の割合が高く、徐々に減少。  
 自宅で死亡する者の割合は、75～79歳代でもっとも少なくなるが、その後増加する。  
 70～74歳代以降は、老人ホームで死亡する者の割合が高齢化とともに増加する。



出典) 人口動態調査 (平成17年)

# 死亡の場所の年次推移

○ 死亡場所については、この50年間で、自宅での死亡が約8割であったものが、医療機関での死亡が約8割を超え、逆転している。

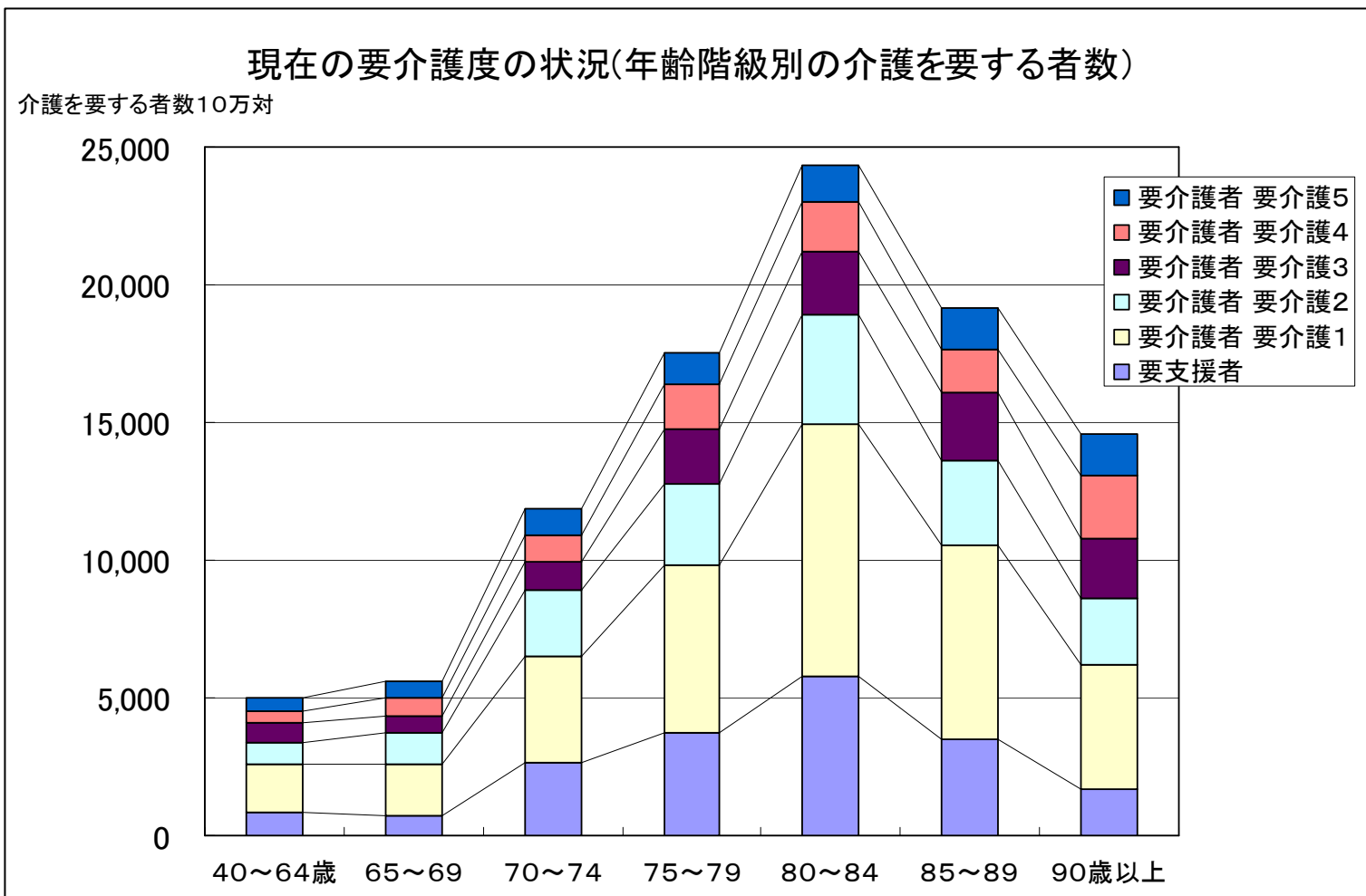


出典) 人口動態調査 (平成17年)



# 年齢階級別にみた要介護度等の状況

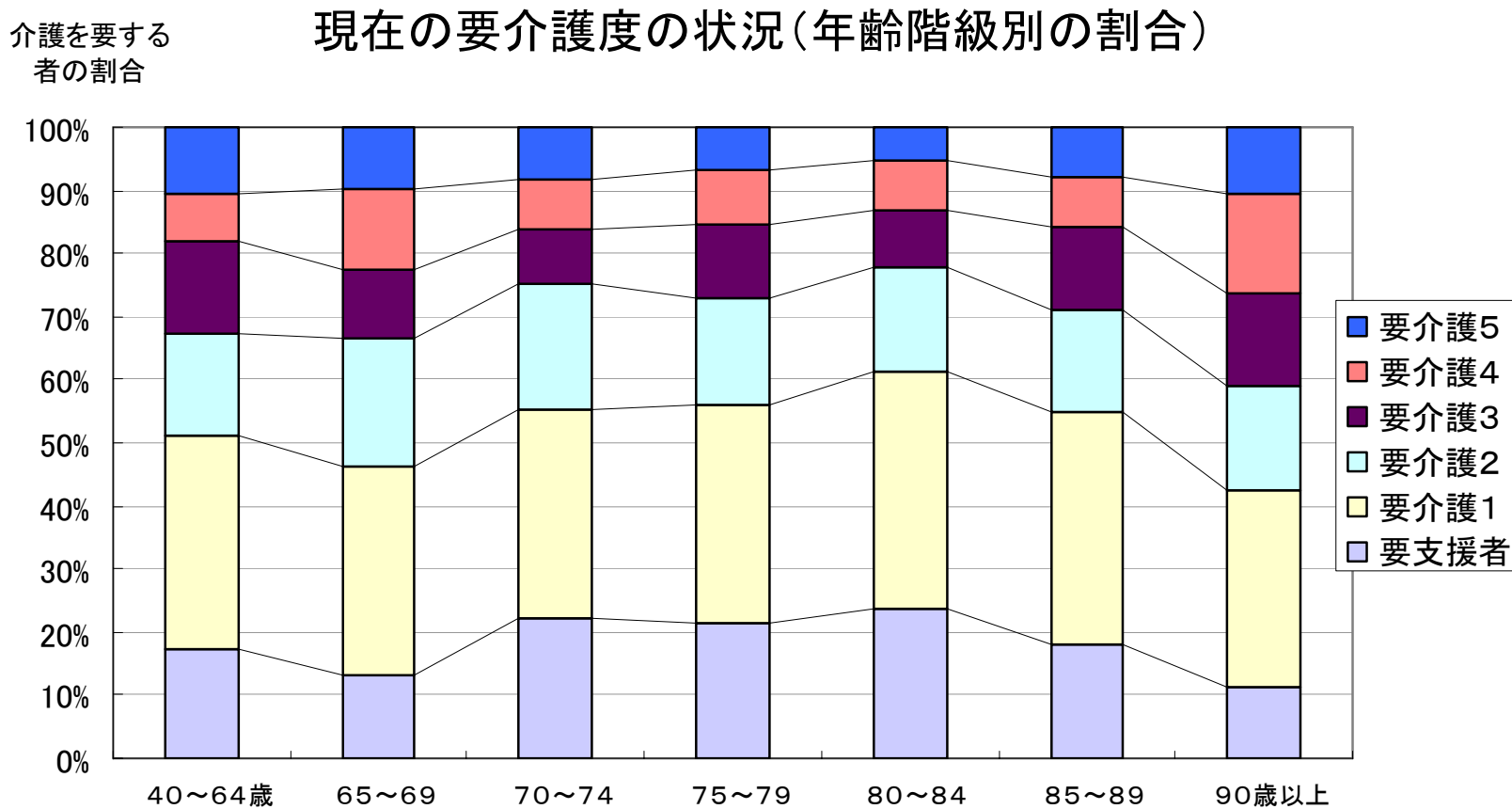
80～84歳の年齢階級層が、最も多く、その後、減少している。



出典) 国民生活基礎調査 (平成16年)

# 年齢階級別にみた要介護度別の割合

年齢階級別の要介護者等の割合は、大きく変動はないが、80歳以上においては、要介護3以上の割合が高齢化とともに、増加している。



出典) 国民生活基礎調査(平成16年)

# 後期高齢者の心身の特性について

# 性・年齢階級別にみた通院者率の 上位5疾病

男女ともに、65歳以上のいずれの年齢階級においても通院者率の第1位は、  
高血圧症である。

第2位は、65歳以上の男性では糖尿病、女性では腰痛症である。

年齢階級	第1位		第2位		第3位		第4位		第5位	
男										
65～74	高血圧症	223.1	糖尿病	105.6	腰痛症	84.1	狭心症・心筋梗塞	60.3	前立腺肥大症	58.3
75～84	高血圧症	242.4	腰痛症	118.7	白内障	117.4	前立腺肥大症	99.2	糖尿病	96.6
85歳以上	高血圧症	202.1	白内障	108.3	腰痛症	105.1	前立腺肥大症	94.8	狭心症・心筋梗塞	79.7
(再掲)65歳以上	高血圧症	227.8	糖尿病	99.9	腰痛症	96.2	白内障	79.2	前立腺肥大症	73.4
(再掲)70歳以上	高血圧症	236	腰痛症	108	白内障	98.1	糖尿病	96	前立腺肥大症	88.7
女										
65～74	高血圧症	233.4	腰痛症	119.7	白内障	103.4	高脂血症	95	肩こり症	81.8
75～84	高血圧症	277.6	腰痛症	163.4	白内障	158.3	骨粗しょう症	101.9	関節症	99.2
85歳以上	高血圧症	257.4	白内障	136.2	腰痛症	117.1	骨粗しょう症	89.1	関節症	82.2
(再掲)65歳以上	高血圧症	251.4	腰痛症	134.6	白内障	126.1	関節症	83.9	高脂血症	80.3
(再掲)70歳以上	高血圧症	268.3	腰痛症	148.7	白内障	145.1	関節症	93.5	骨粗しょう症	89.5

注：1) 傷病は複数回答である。

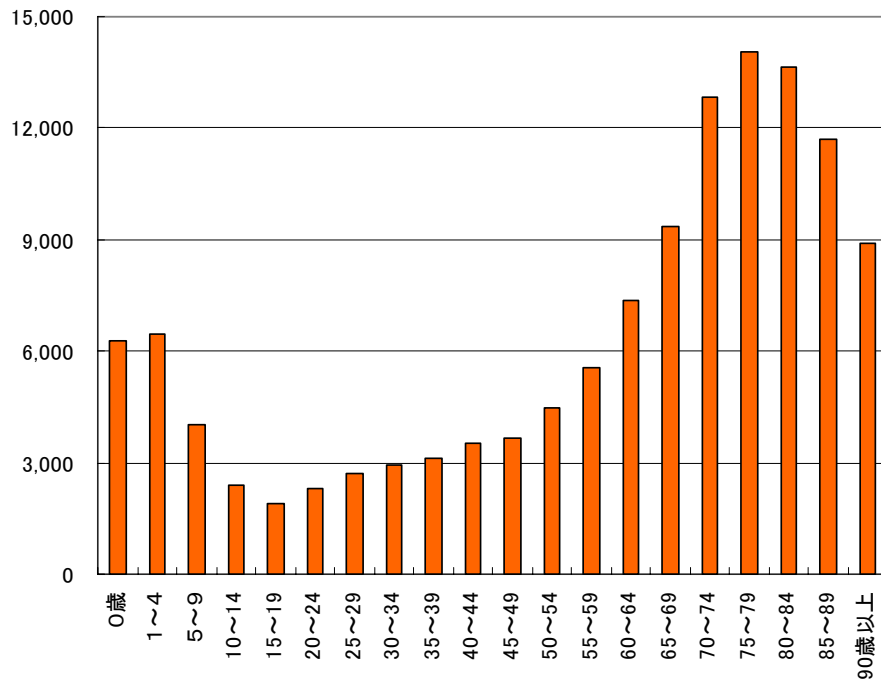
2) 通院者には入院者は含まないが、分母となる世帯人員数には入院者を含む。

出典) 国民生活基礎調査(平成16年・健康票)

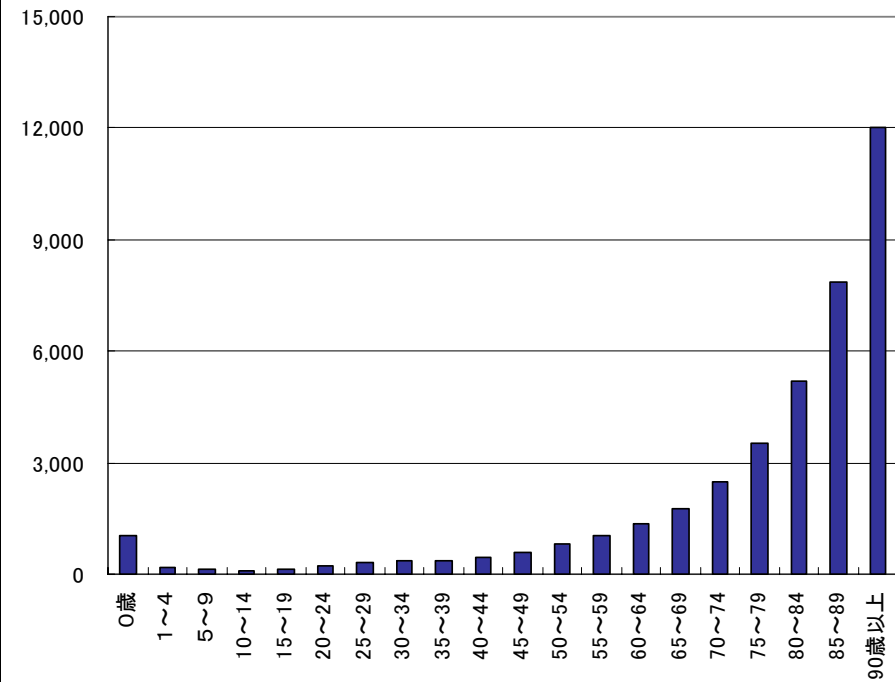
# 高齢者の心身の特性（疾病特性等）（1）

疾病全体で見ると、入院受療率は後期高齢期になって増加する傾向にあり、また、外来は壮年期から加齢に伴い増加する傾向にある。

### 年齢階級別の受療率(外来)



### 年齢階級別の受療率(入院)



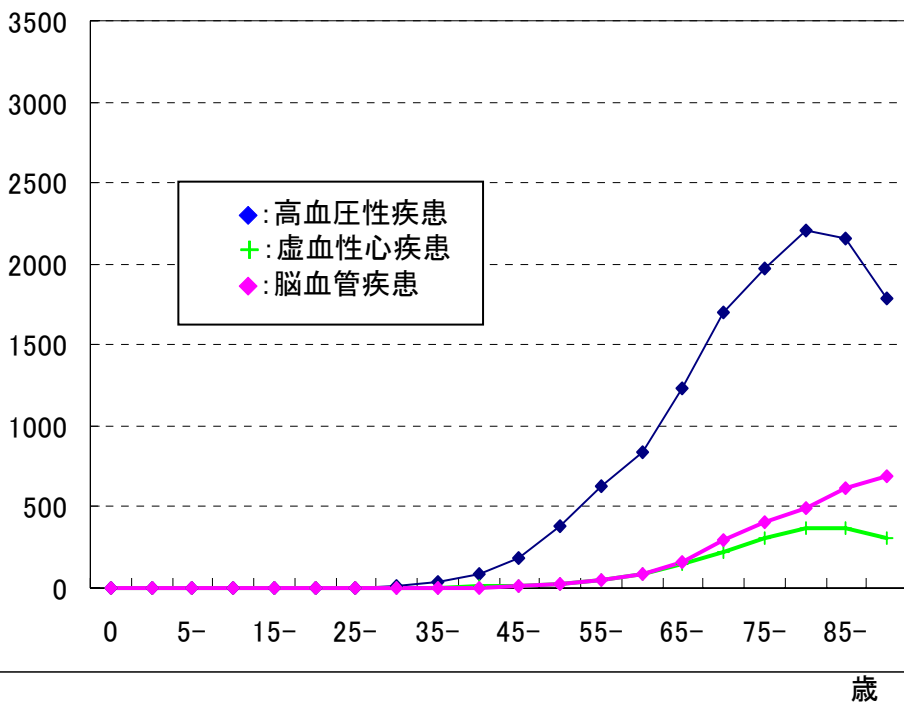
出典) 患者調査 (平成17年)

## 高齢者の心身の特性（疾病特性等）（2）

疾病の中でも、高血圧性疾患、虚血性心疾患、脳血管疾患については、外来において壮年期から加齢に伴い増加し、入院受療率は後期高齢期になって増加する傾向が顕著に現れる。

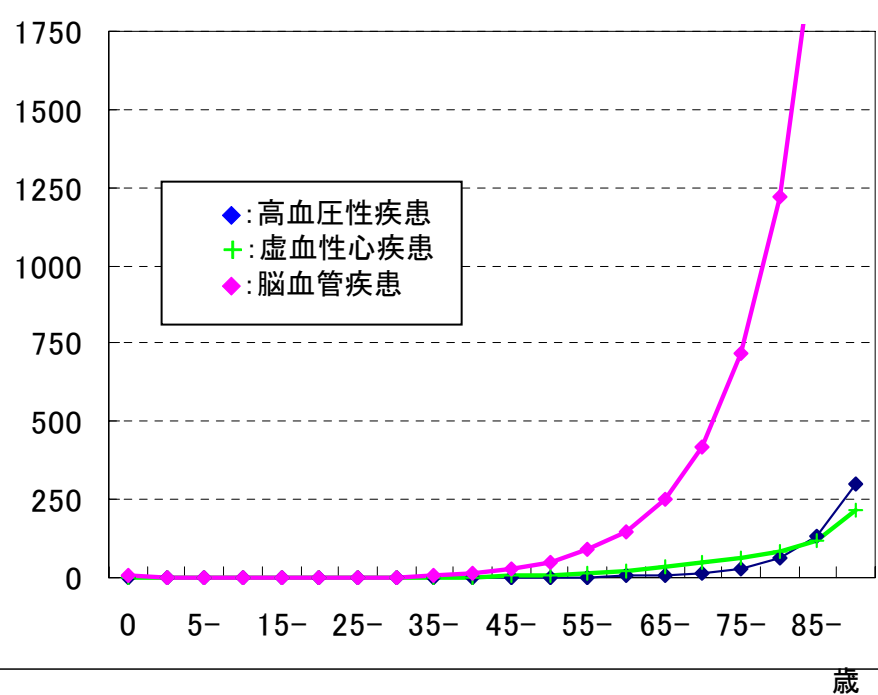
### 年齢階級別の受療率・外来

受療率(人口10万対)



### 年齢階級別の受療率・入院

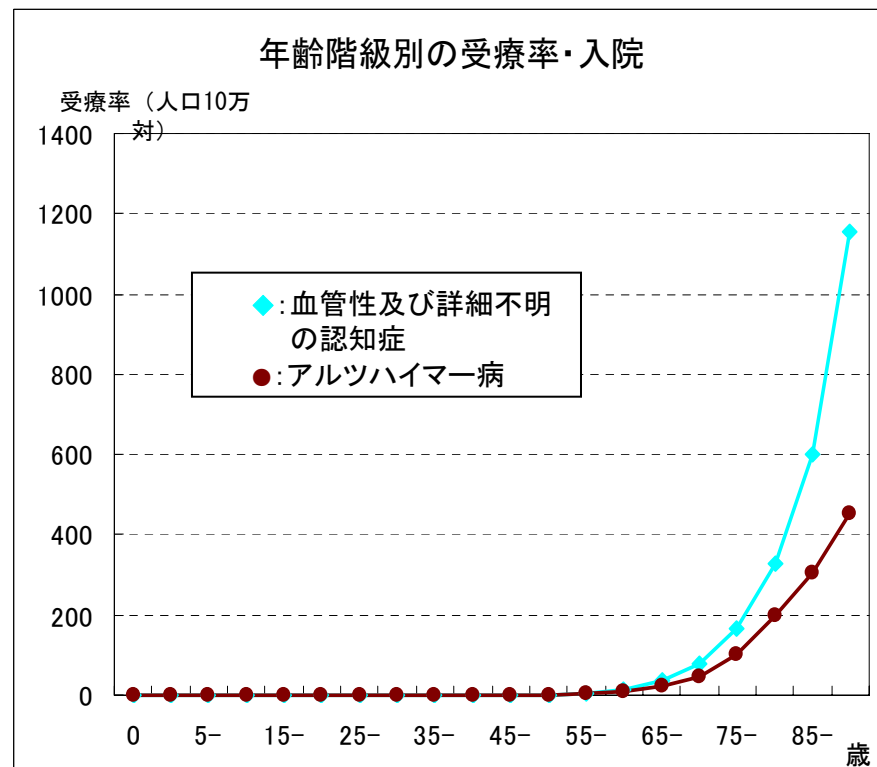
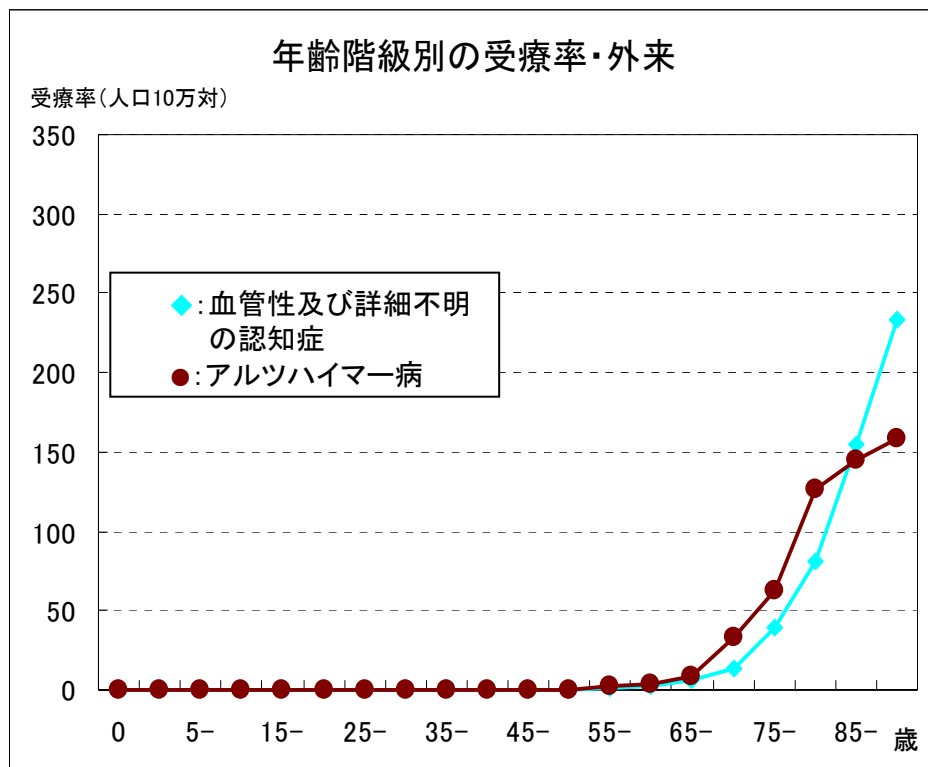
受療率(人口10万対)



出典) 患者調査 (平成17年)

## 高齢者の心身の特性（疾病特性等）（3）

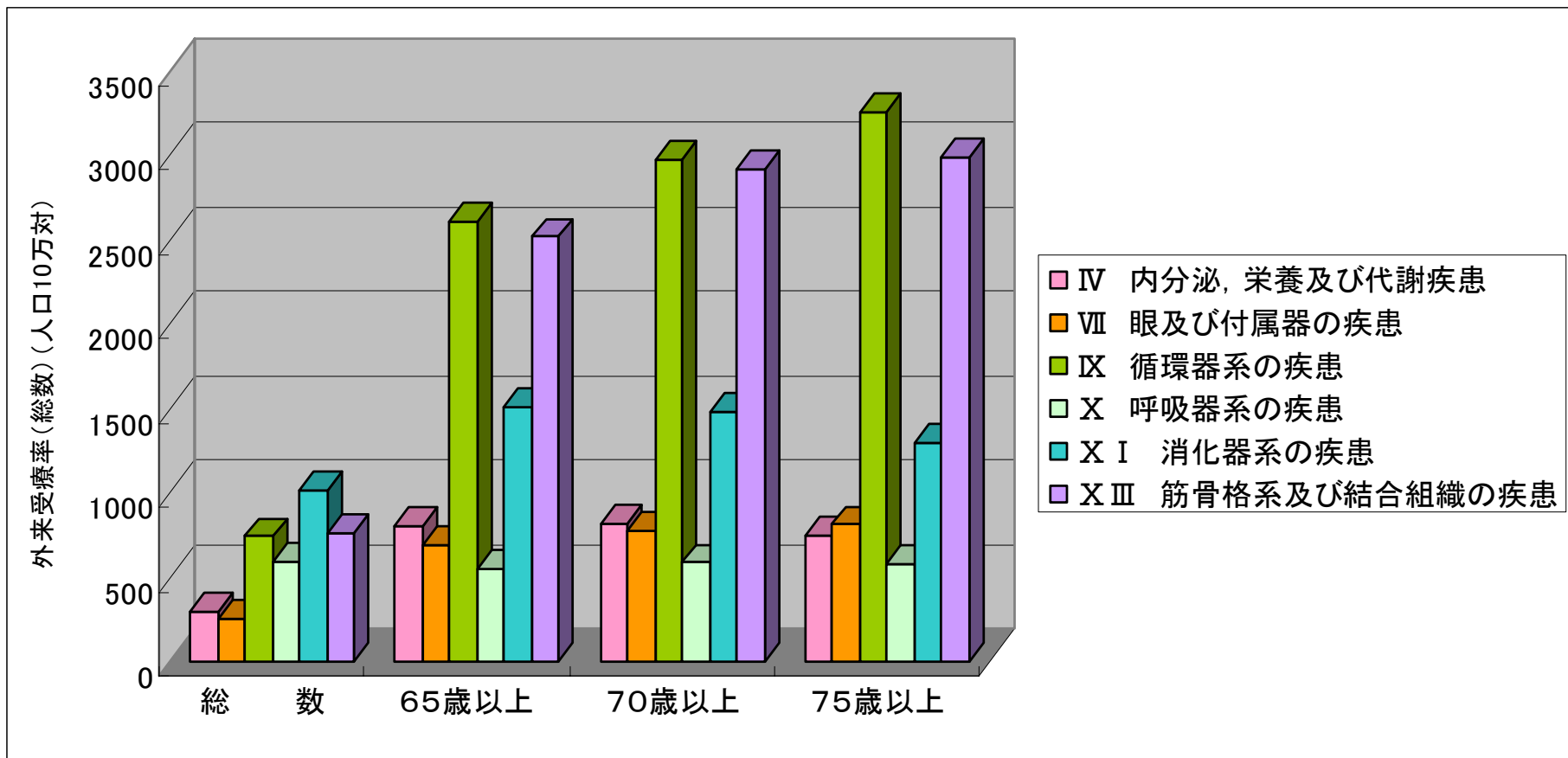
認知症については、外来においては、65歳から受療率が上昇し、75歳以上でさらに上昇が認められる。血管性の認知症は、70歳以上とやや遅れて受療率の上昇が認められる。入院受療率は後期高齢期になって増加する傾向が顕著に現れる。



出典）患者調査（平成17年）

# 傷病分類別外来受療率（総数）（人口10万対）

・高齢者では循環器系の疾患と筋骨格系の疾患において特に外来受療率が増加する。

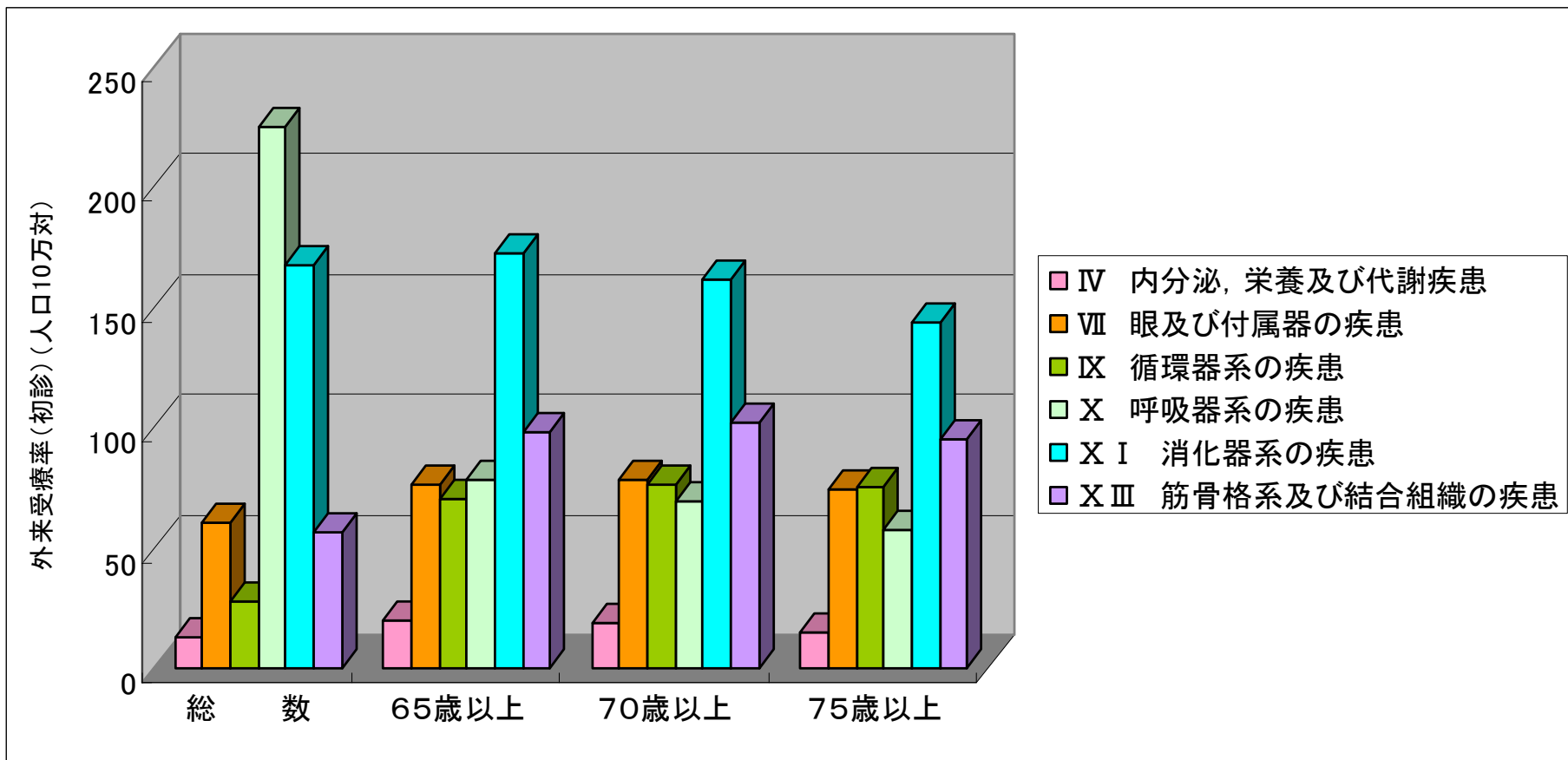


出典) 患者調査 (平成17年)



# 傷病分類別外来受療率（初診）（人口10万対）

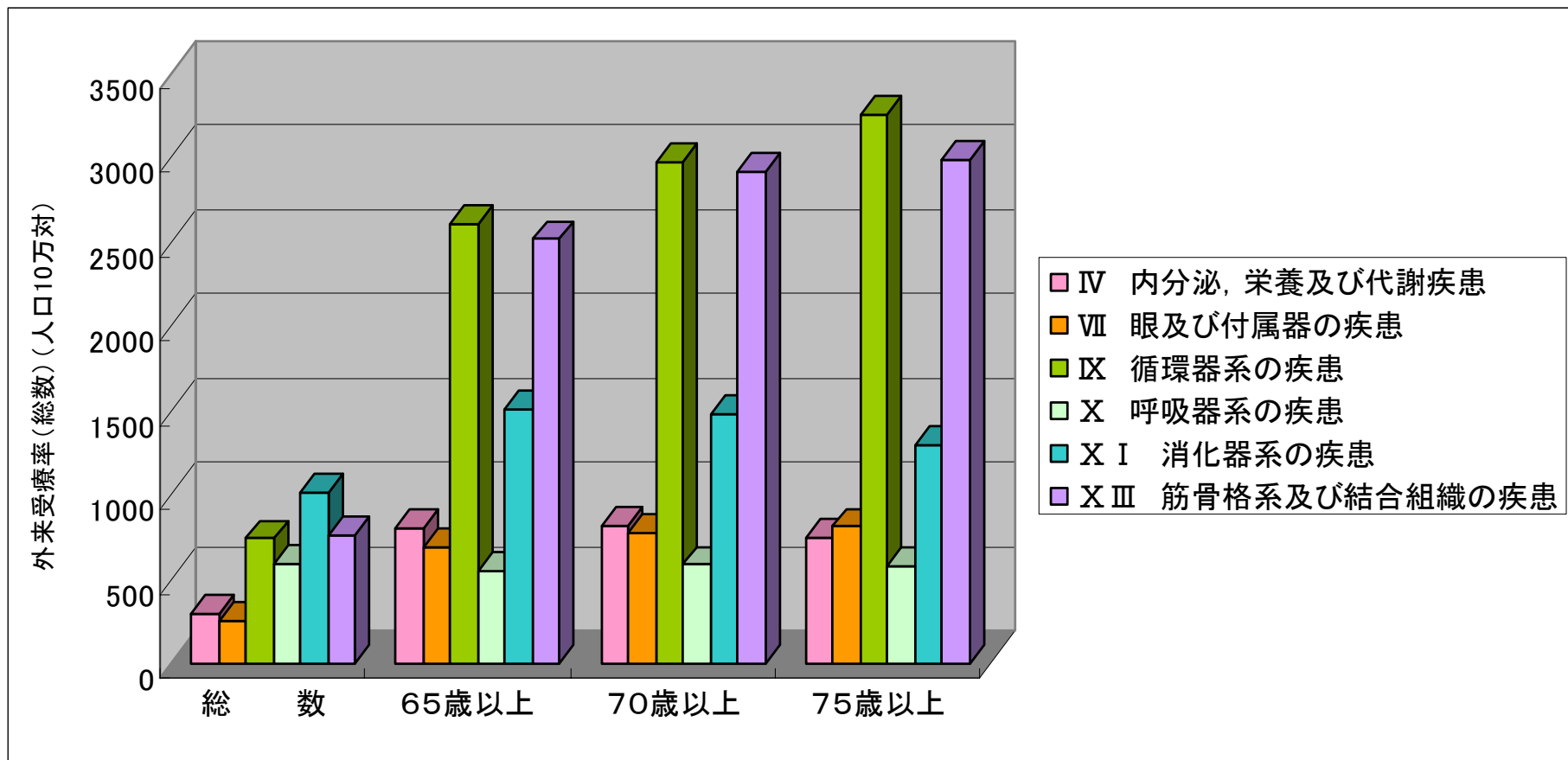
・高齢者では消化器系の疾患において特に初診における受療率が増加する。



出典) 患者調査 (平成17年)

# 傷病分類別外来受療率（再来）（人口10万対）

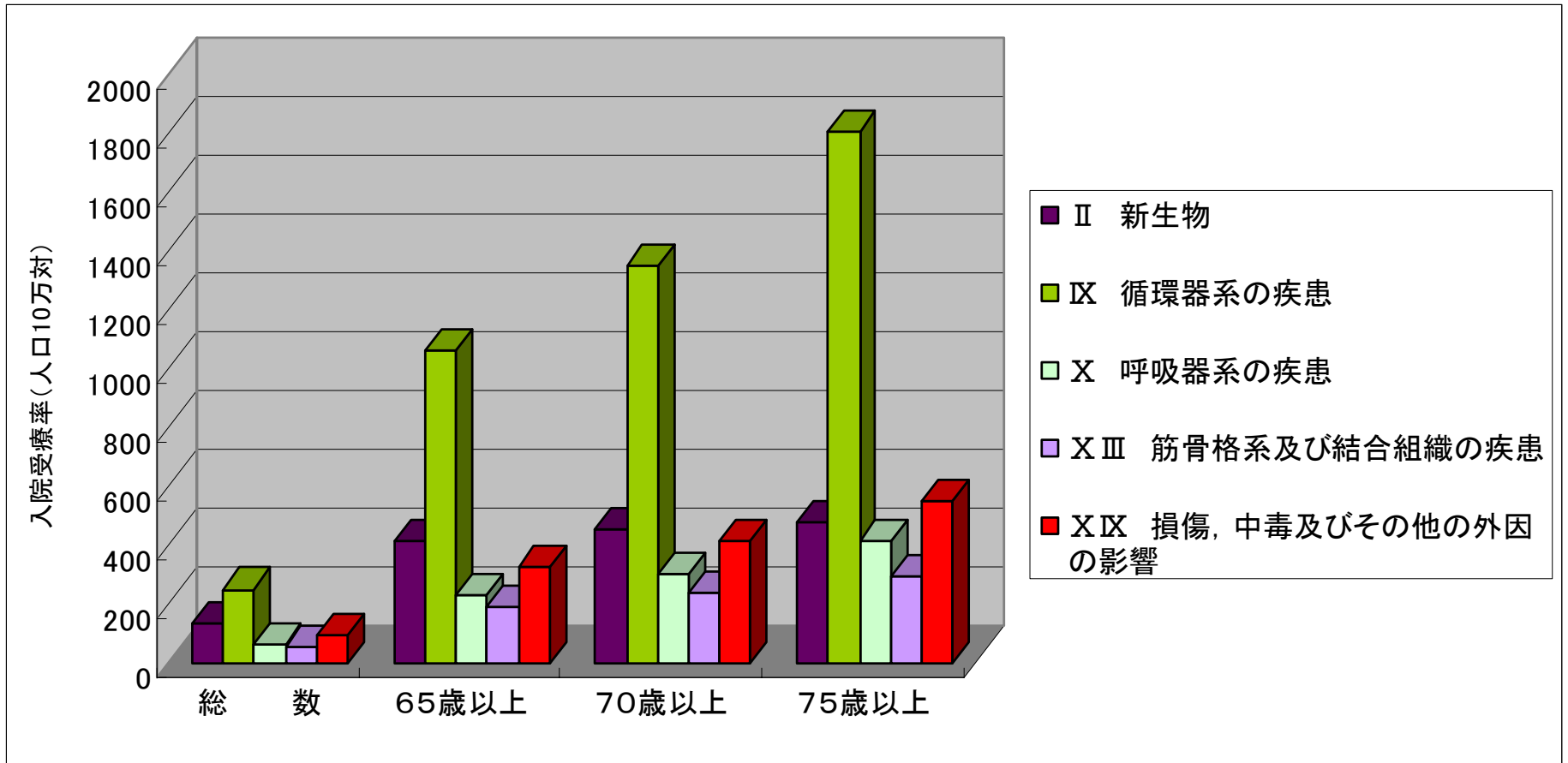
・高齢者では循環器系の疾患と筋骨格系の疾患において再来時の受療率が増加する。



出典) 患者調査 (平成17年)

# 傷病分類別入院受療率（人口10万対）

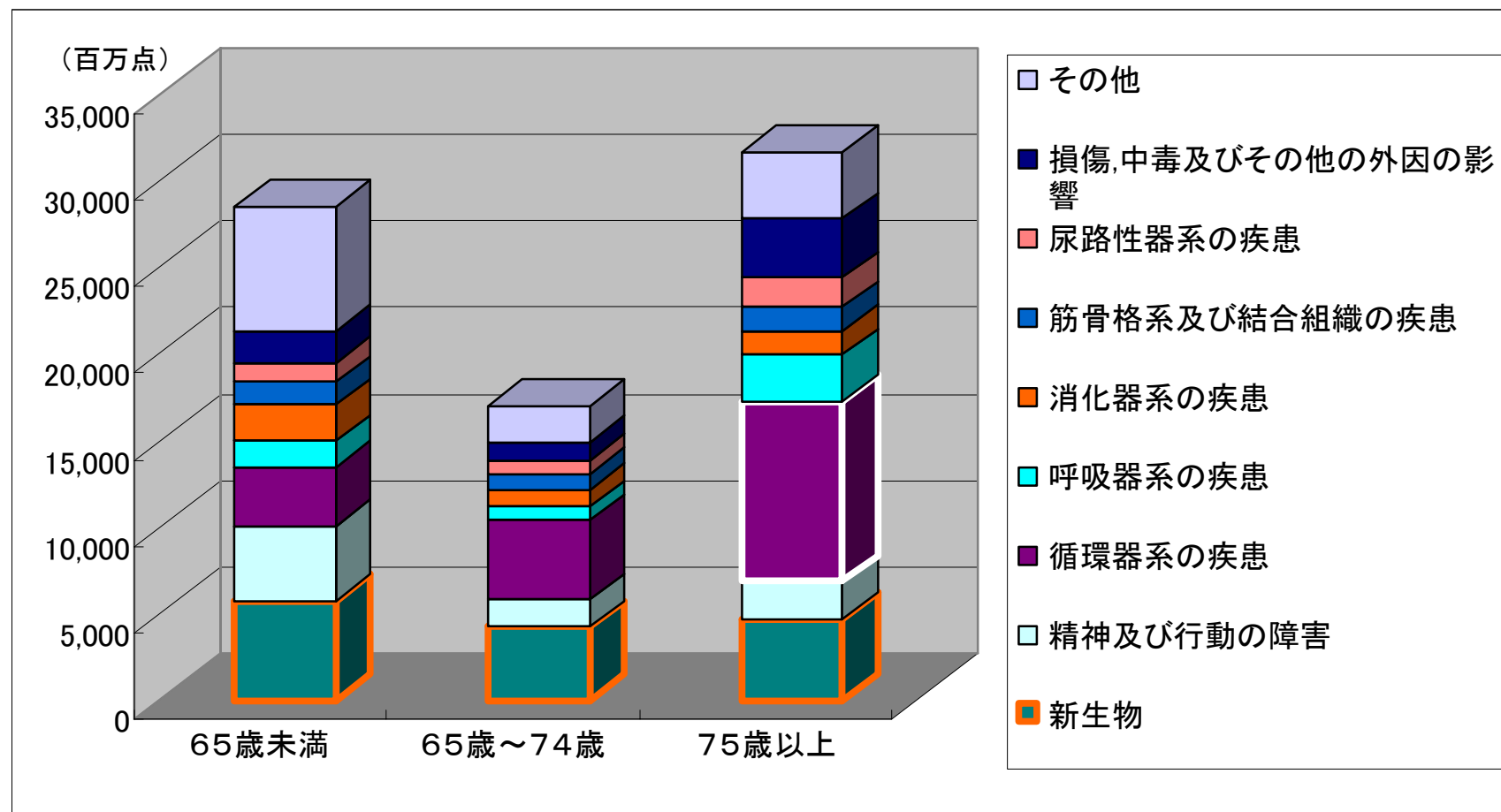
・75歳以上の高齢者では循環器系の疾患において特に入院受療率が増加する。



出典) 患者調査 (平成17年)

# 年齢階級別・疾患分類別にみた医療費（入院）

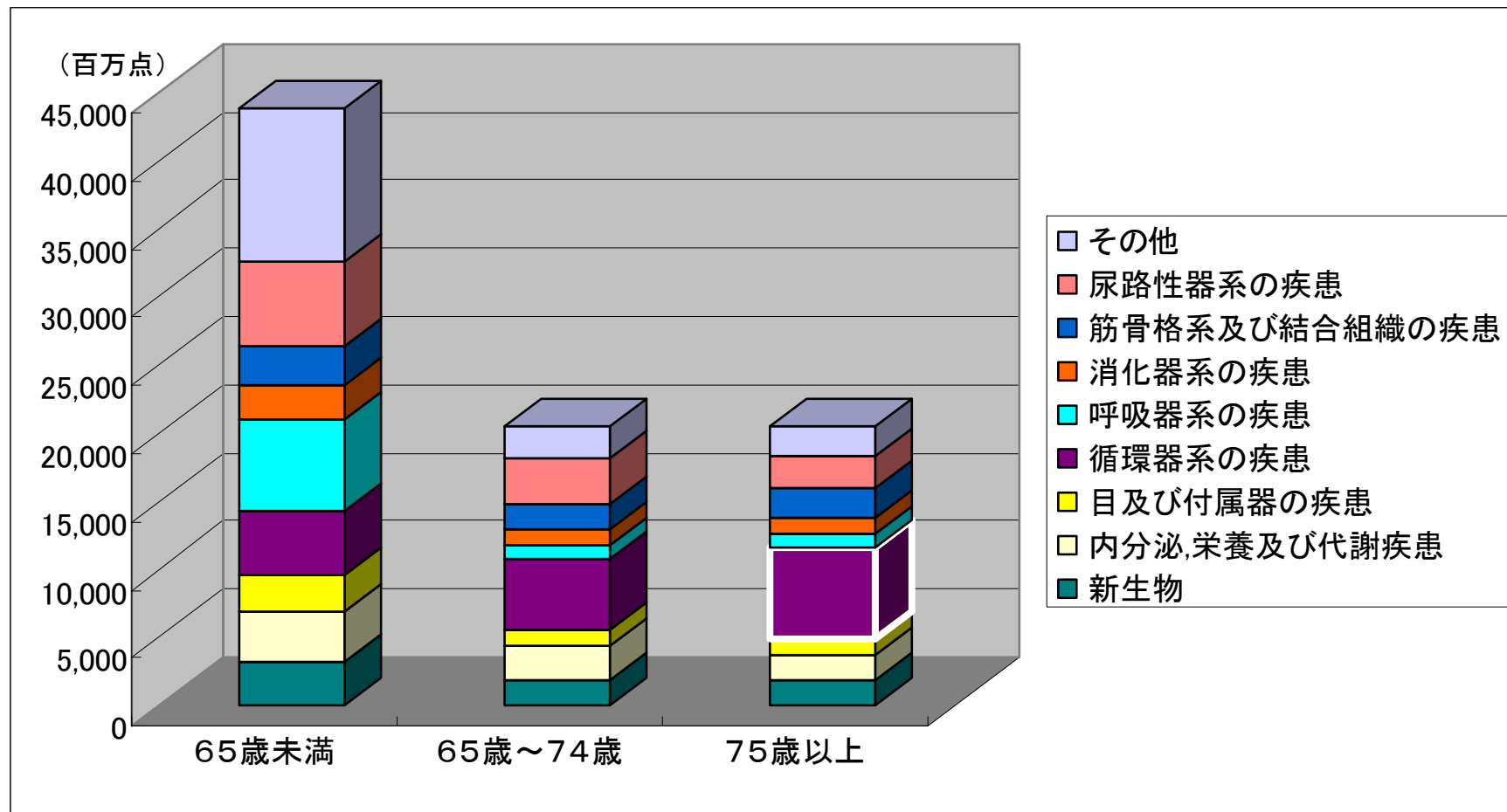
- ・入院における医療費では、新生物と循環器疾患の占める割合が大きい。
- ・新生物は65歳未満が多く、循環器疾患は75歳以上に多い。



出典：平成17年社会医療診療行為別調査、特別集計をもとに保険局医療課で作成

# 年齢階級別・疾患分類別にみた医療費（入院外）

・後期高齢者の入院外における医療費では循環器系疾患の占める割合が高い。



出典：平成17年社会医療診療行為別調査、特別集計をもとに保険局医療課で作成

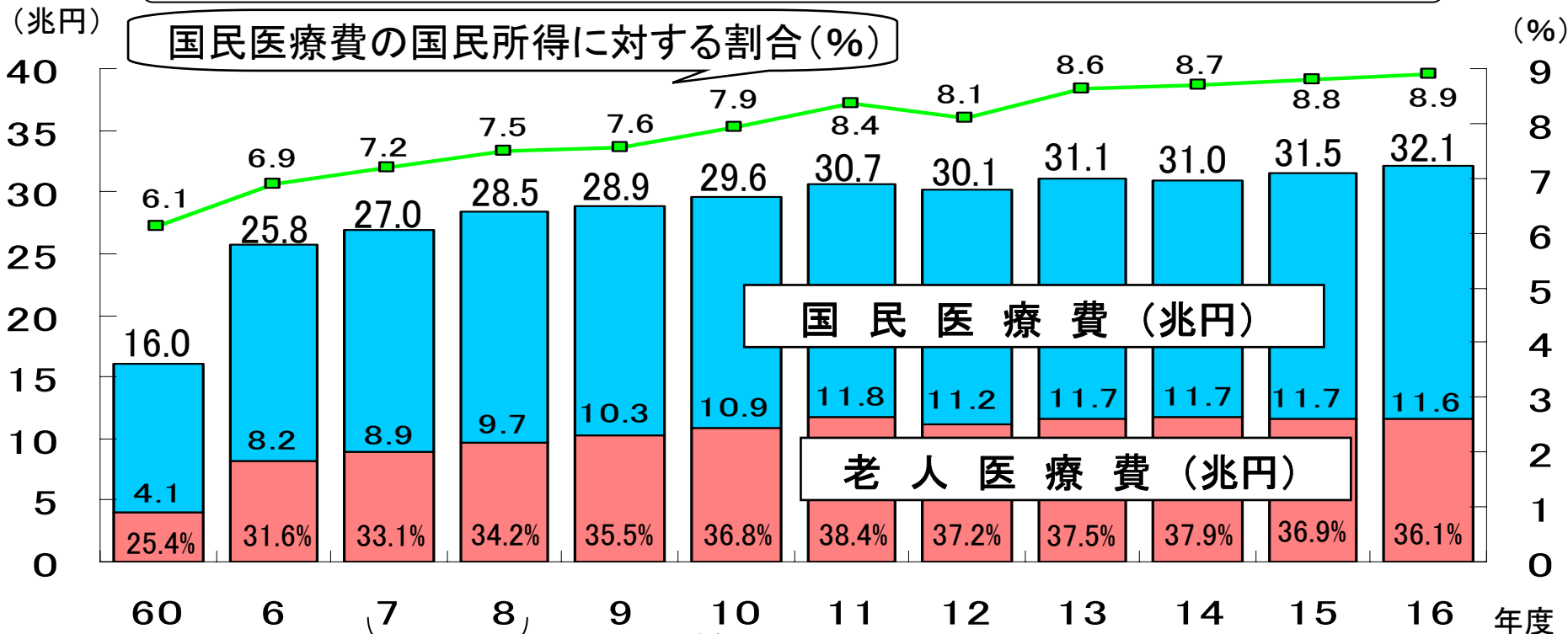


# 医療の利用状況

# 医療費の動向

○我が国の国民医療費は国民所得を上回る伸びを示している。

国民医療費の国民所得に対する割合(%)



・食事療養費  
制度の創設

・老人一部負担金の  
物価スライド実施

・被用者本人  
2割負担へ  
引上げ  
・外来薬剤  
一部負担導入

・診療報酬・  
薬価等の改定  
▲1.3%

・介護保険制度  
が施行  
・高齢者1割負  
担導入

・診療報酬・  
薬価等の改定  
▲2.7%  
・高齢者1割  
負担徹底

・被用者本人  
3割負担へ  
引上げ  
・診療報酬・  
薬価等の改定  
▲1.0%

国民医療費等の対前年度伸び率(%)

	60	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
国民医療費	6.1	5.9	4.5	5.6	1.6	2.3	3.8	▲1.8	3.2	▲0.5	1.9	1.8
老人医療費	12.7	9.5	9.3	9.1	5.7	6.0	8.4	▲5.1	4.1	0.6	▲0.7	▲0.7
国民所得	7.4	1.4	0.1	1.3	1.0	▲2.7	▲1.5	1.3	▲2.9	▲1.4	0.7	0.7

注1: 国民所得は、内閣府発表の国民経済計算(2006年5月発表)による。

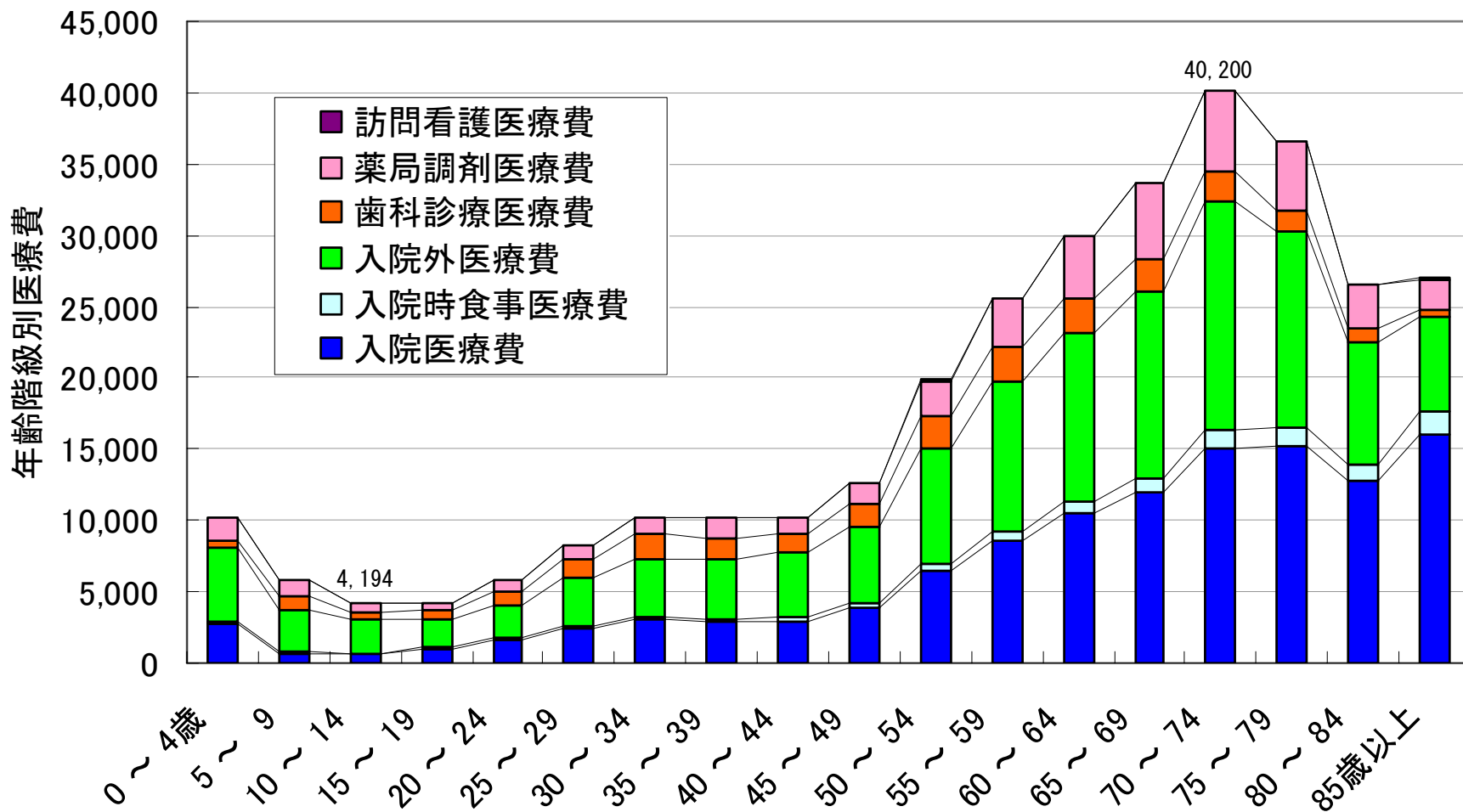
注2: 老人医療費は、平成14年の制度改正により、対象年齢が70歳から段階的に引き上げられており、平成16年10月より72歳以上となっている。



# 年齢階級別にみた診療種類別の国民医療費

(平成16年度)

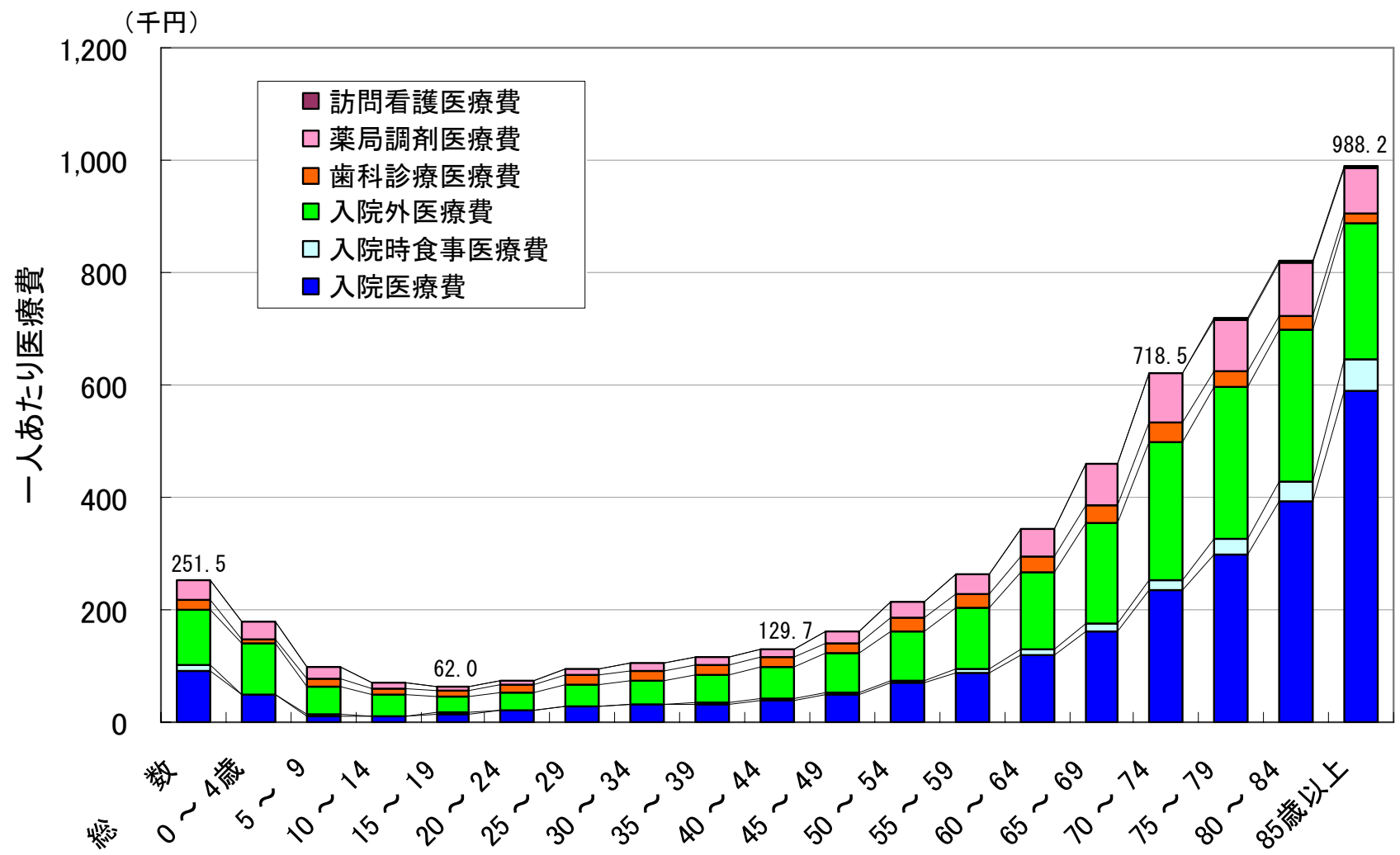
年齢階級別では、70～74歳が、最も医療費が高額となっている。



# 年齢階級別にみた1人当たり診療種類別の国民医療費

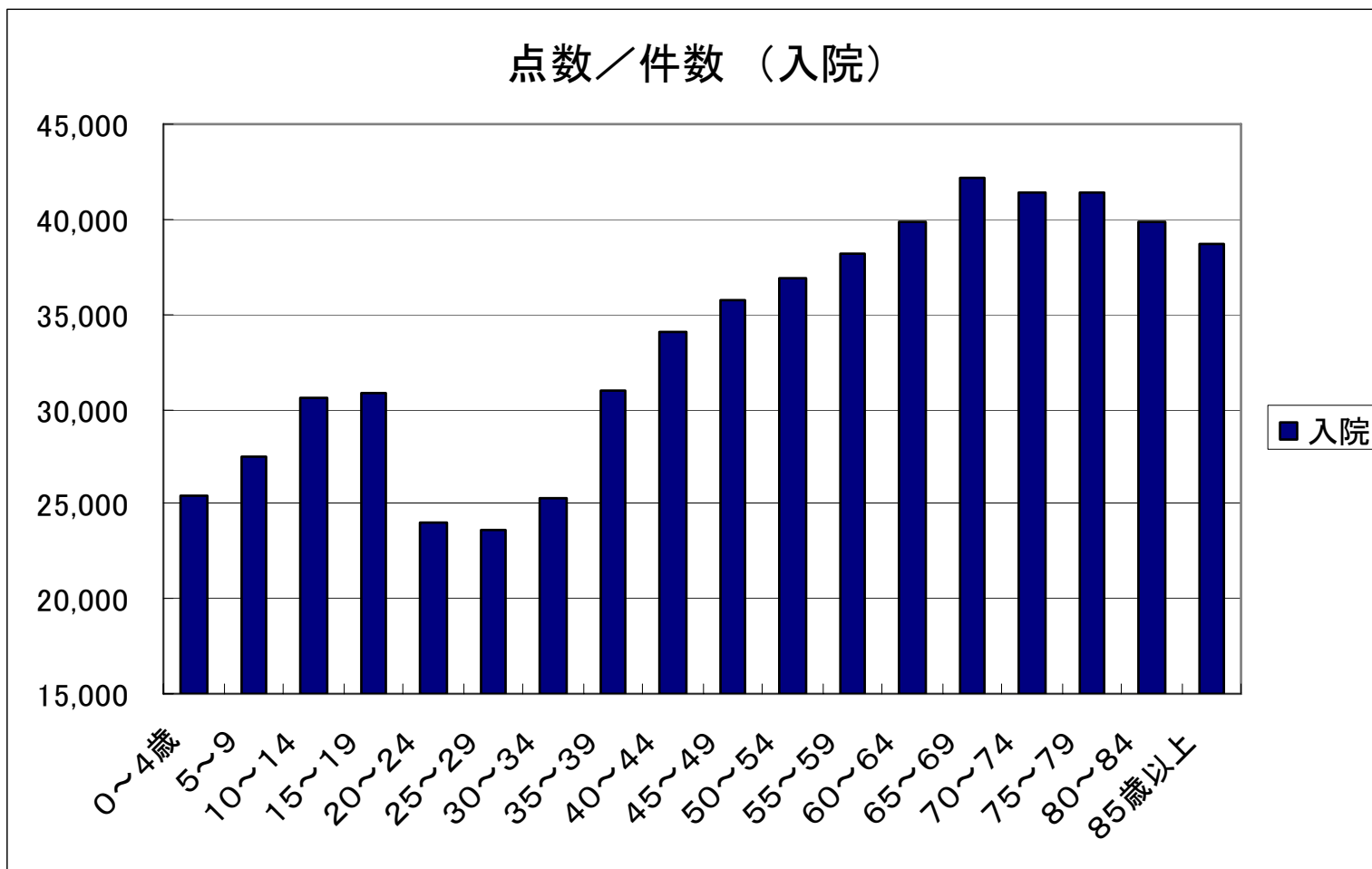
(平成16年度)

高齢者ほど1人あたりの医療費が高く、特に医療費に占める入院医療費の割合が高い。



# 年齢階級別にみた入院・入院外別の医科診療件数・点数

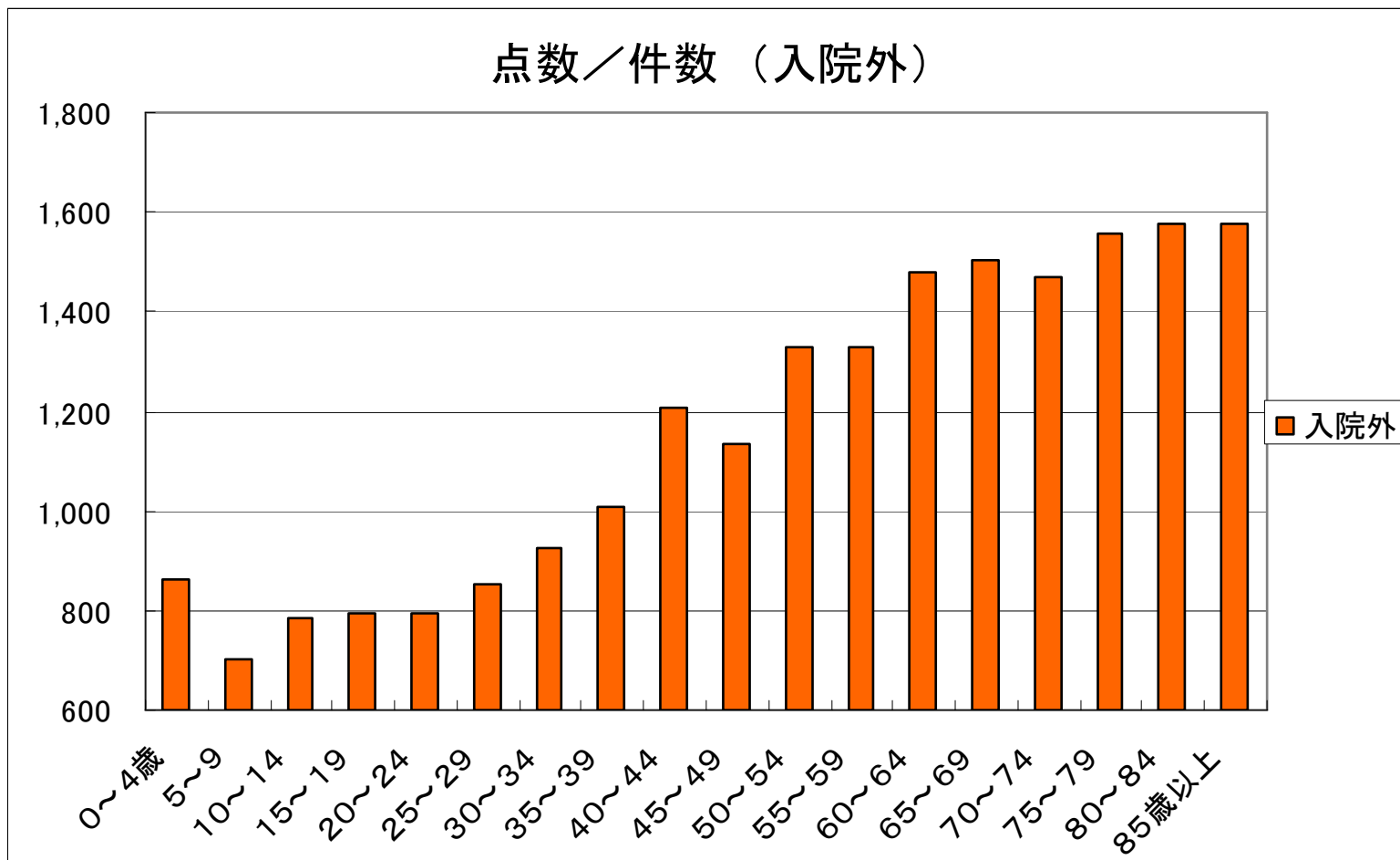
1件あたりの医科診療点数は、65～69歳代をピークに、その後、高齢化が進むにつれ、減少している。



出典)社会医療診療行為別調査(平成17年6月審査分)

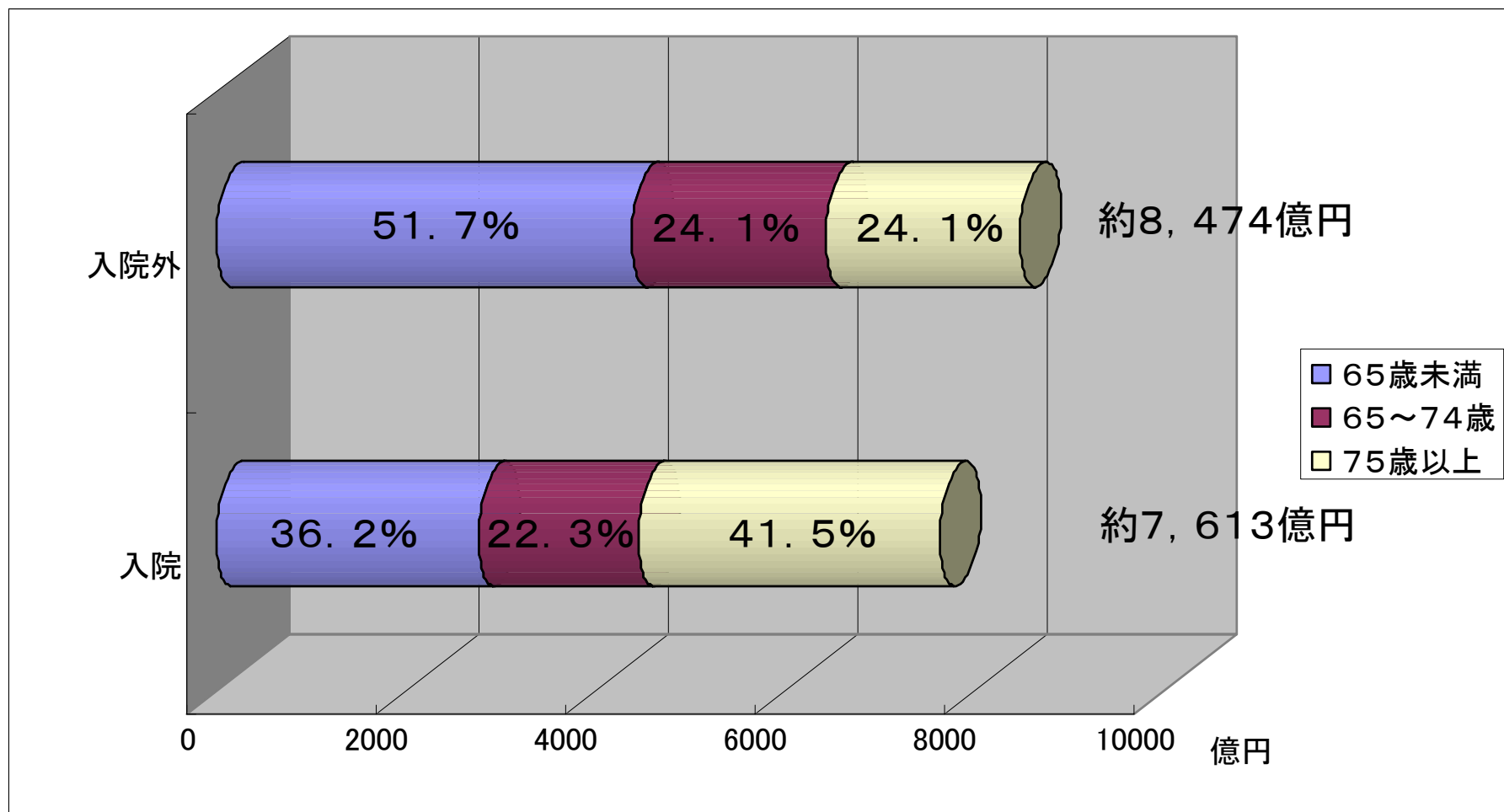
# 年齢階級別にみた入院・入院外別の医科診療件数・点数

入院外における1件あたりの医科診療点数は、おおむね高齢化とともに、増加する傾向にある。



出典)社会医療診療行為別調査(平成17年6月審査分)

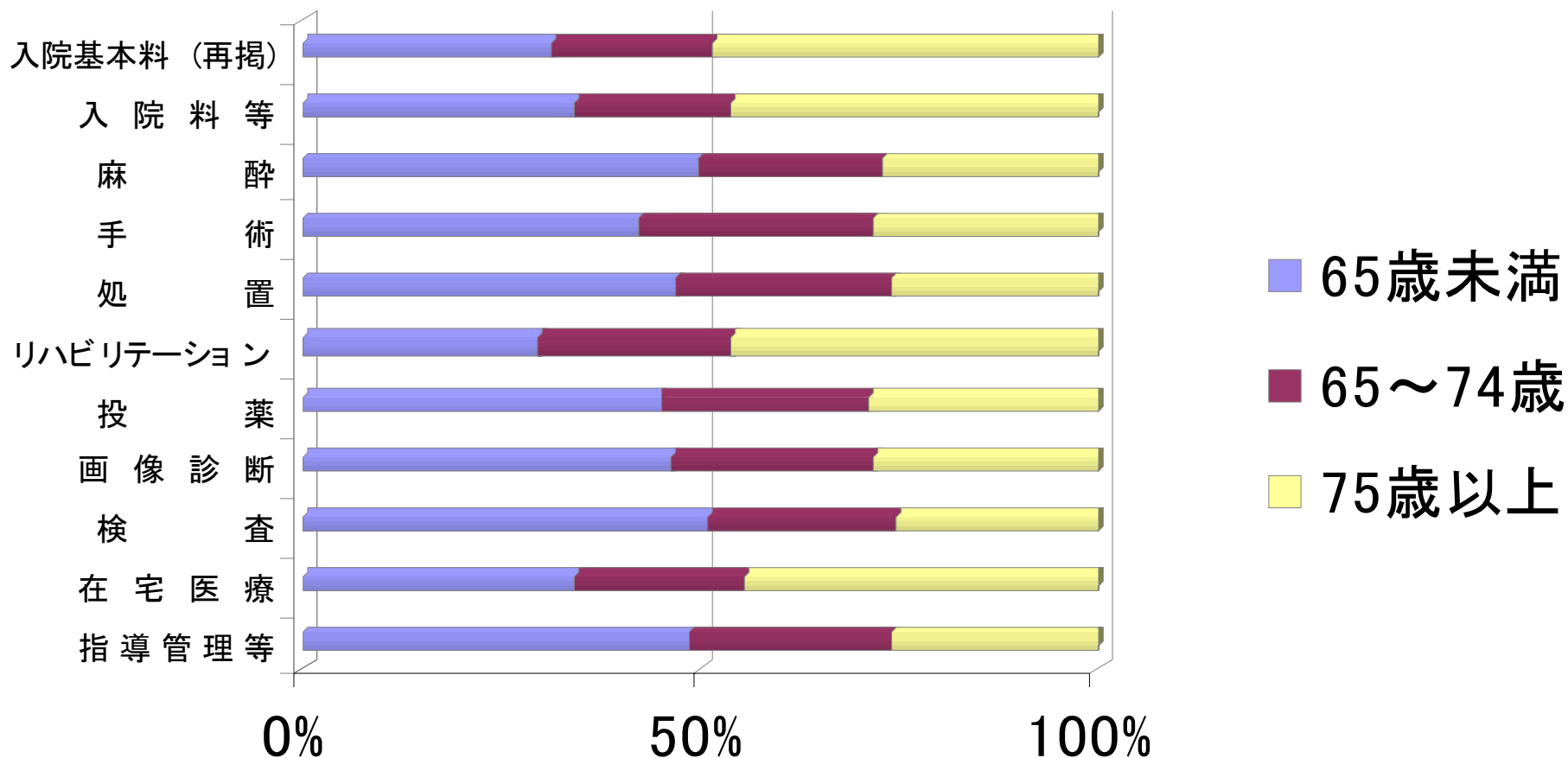
後期高齢者は入院における医療費の占める割合高く、65歳未満の患者は入院外における医療費の占める割合が高い



出典)社会医療診療行為別調査(平成17年6月審査分)

# 年齢階級別にみた診療行為別の診療報酬点数の割合

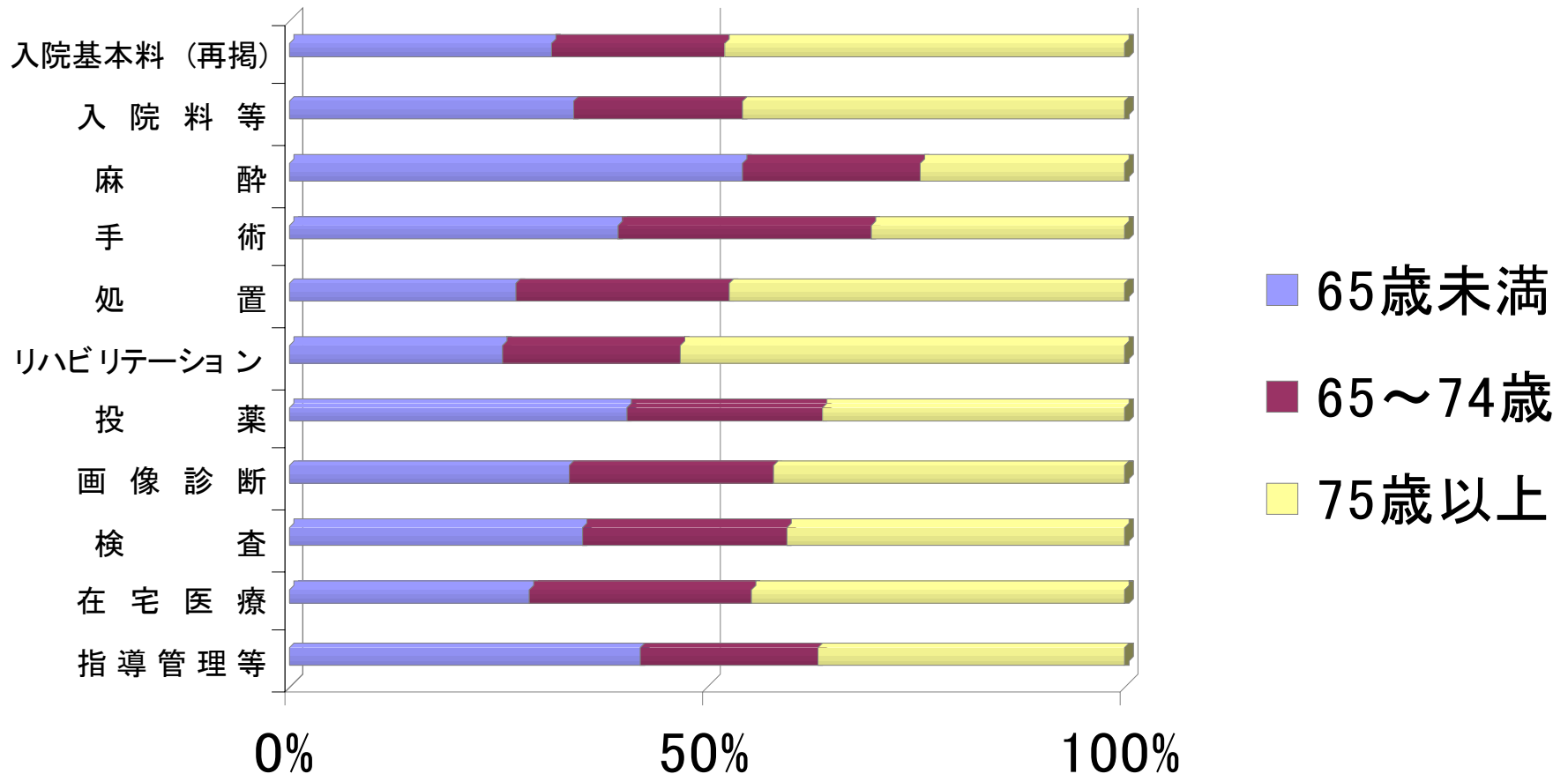
入院料、リハビリテーション、在宅医療においては、おおよそ50%を75歳以上が占めている。



出典) 社会医療診療行為別調査(平成17年6月審査分)

# 年齢階級別にみた診療行為別の診療報酬点数の割合（入院）

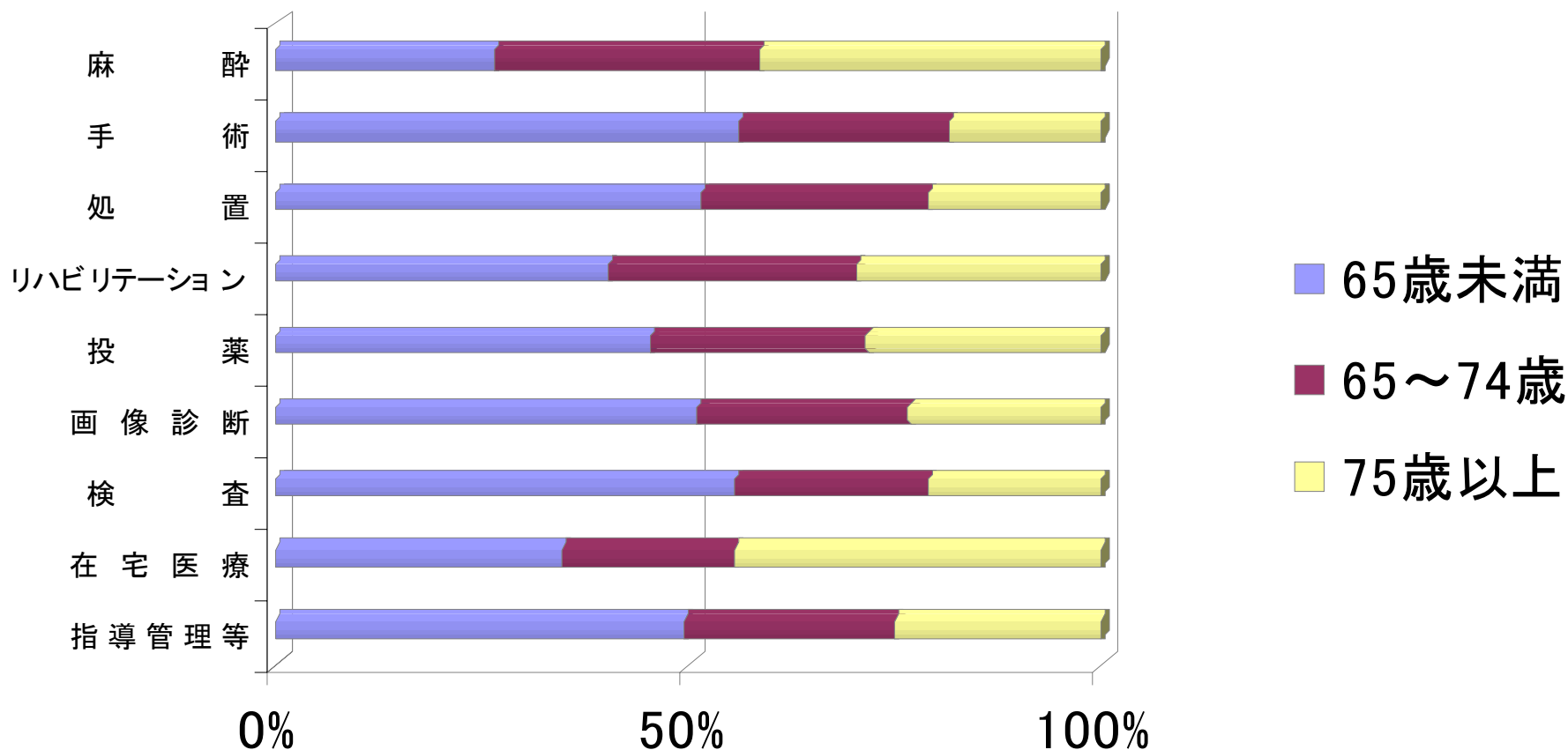
入院料、処置、リハビリテーション、在宅医療においては、おおよそ50%を75歳以上が占めている。



出典) 社会医療診療行為別調査(平成17年6月審査分)

# 年齢階級別にみた診療行為別の診療報酬点数の割合（入院外）

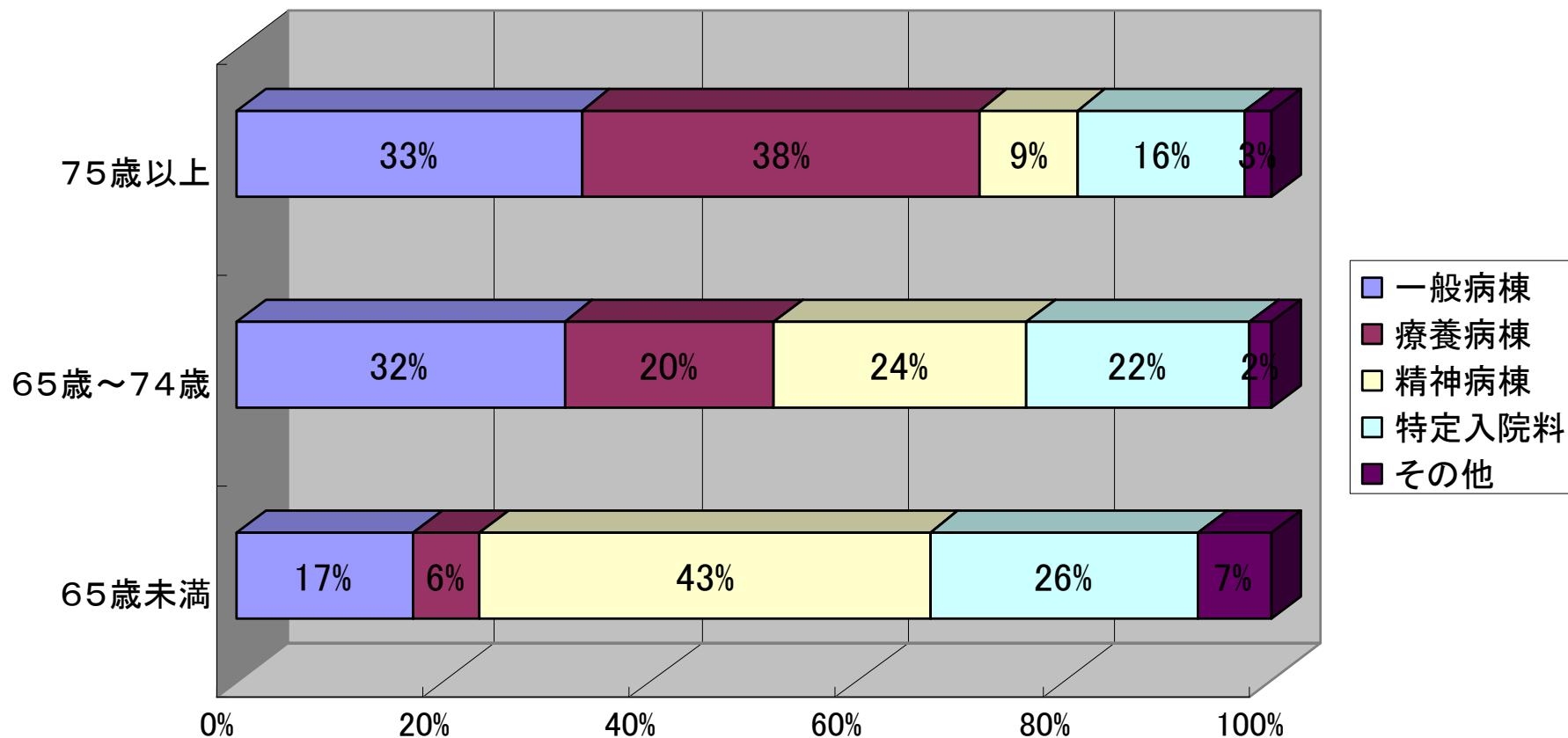
入院外では、麻酔、在宅医療において、65歳以上の占める割合が大きい。



出典) 社会医療診療行為別調査(平成17年6月審査分)

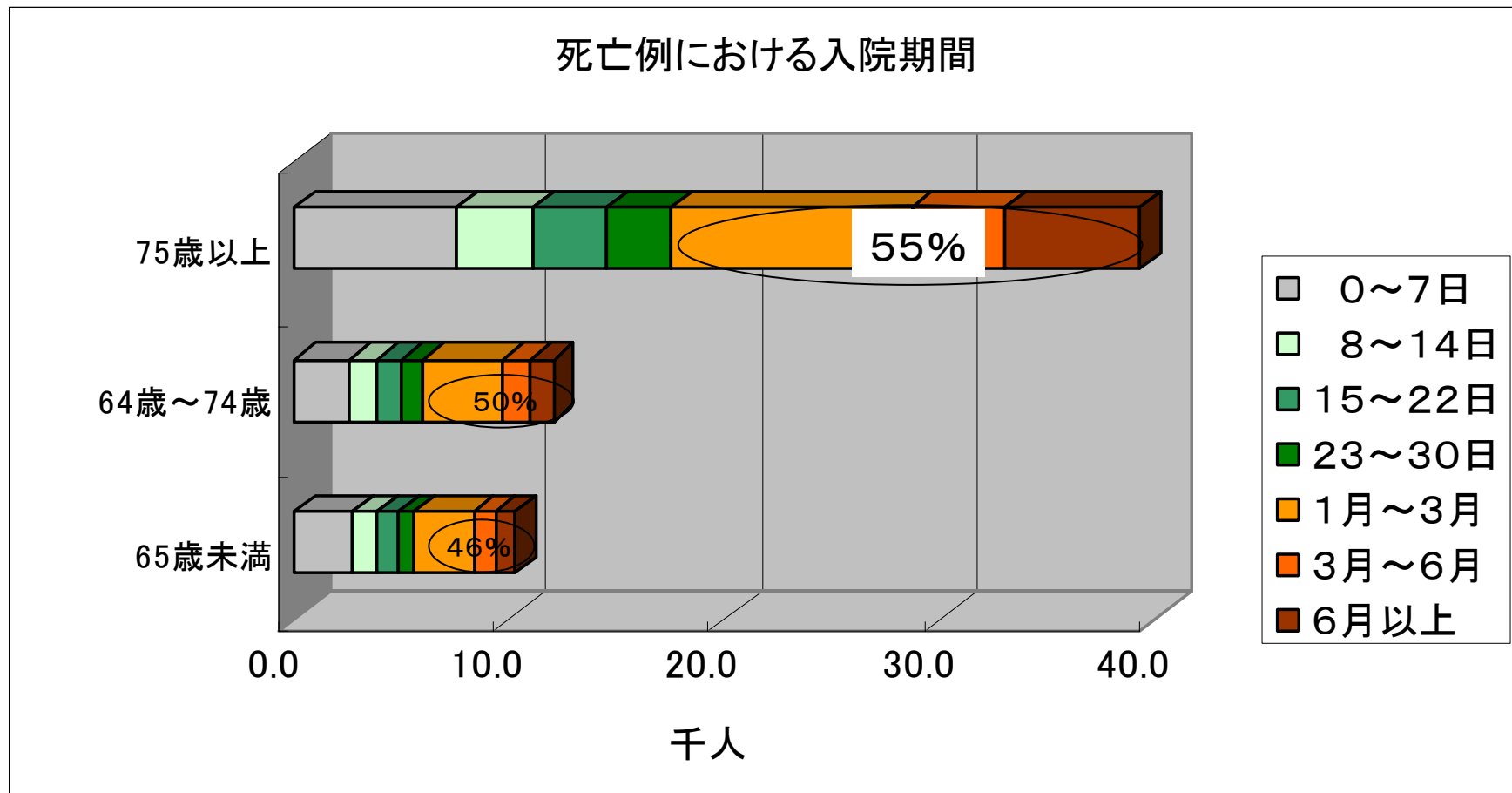


75歳以上では、約4割の患者は療養病棟に入院している。



出典：平成17年社会医療診療行為別調査、特別集計をもとに保険局医療課で作成

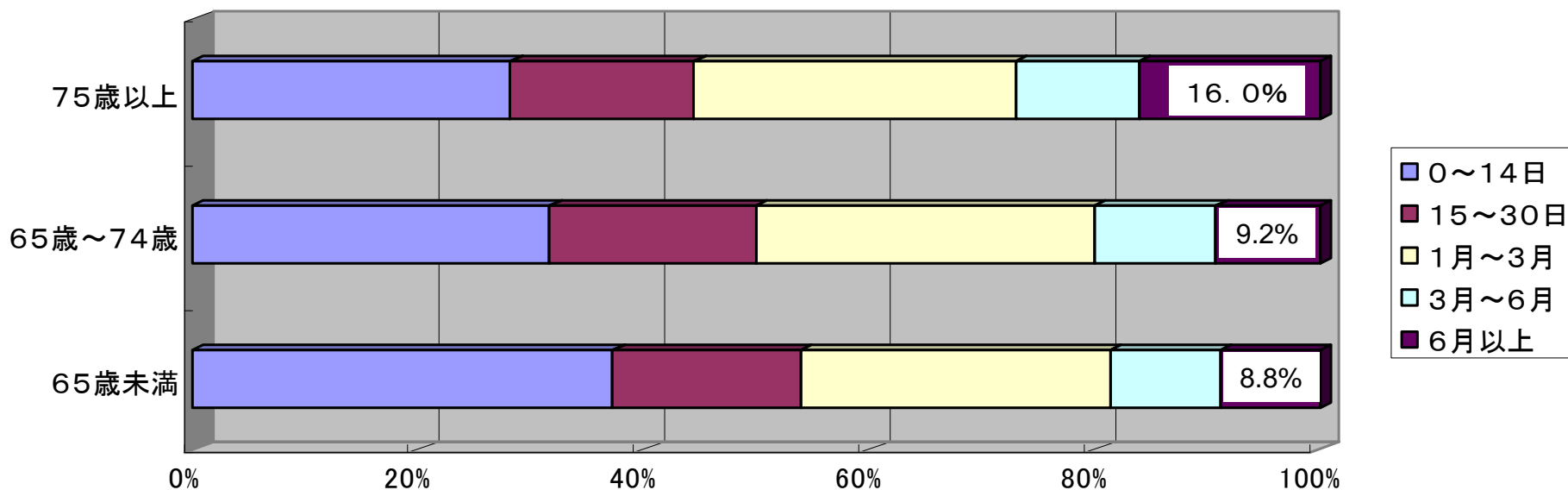
75歳以上の死亡例において、約半数(55%)は入院期間が1ヶ月を超えている。



出典)平成17年患者調査、特別集計をもとに保険局医療課で作成

75歳以上の死亡例においては、長期間入院している例、特に6月以上入院している例が他の年齢階級に比べて多い。

転帰死亡例の入院期間別年齢割合

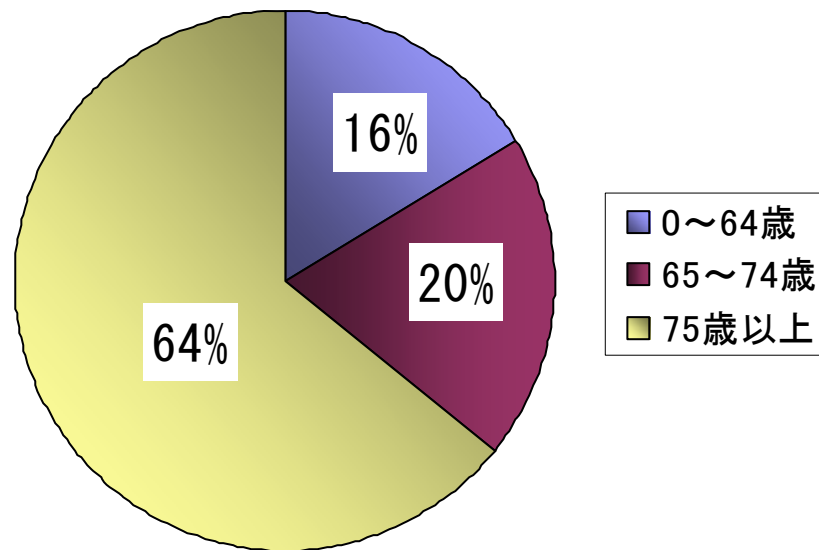


出典：平成17年患者調査、特別集計をもとに保険局医療課で作成

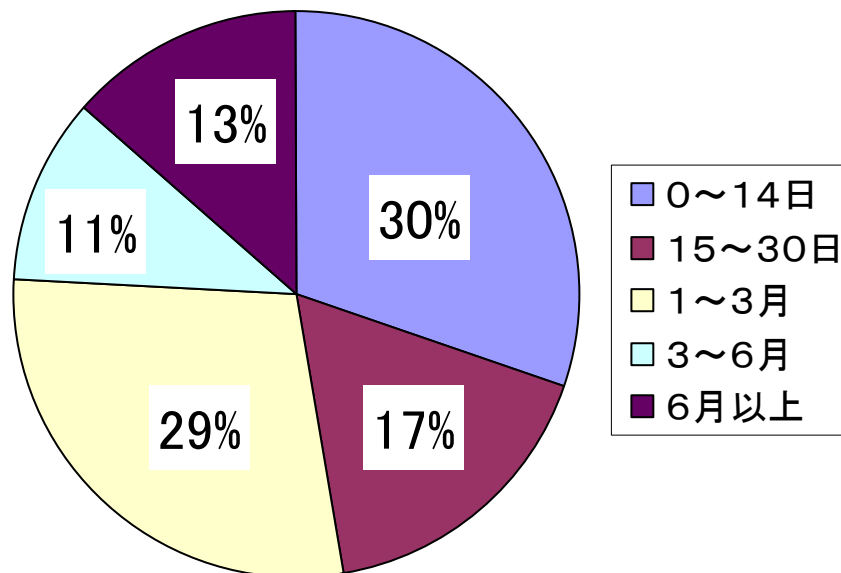
# 転帰が死亡となった推計患者数の割合

死亡例における割合では75歳以上が6割を占める

転帰が死亡となった者の年齢階級別割合



転帰が死亡となった者の在院日数別割合



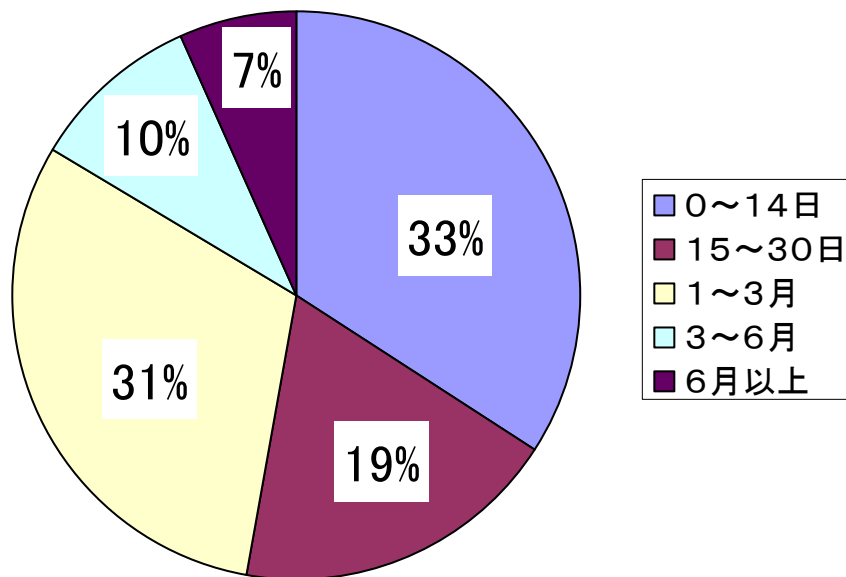
出典) 患者調査 (平成17年)

死亡例における入院期間は1ヶ月未満の者が約半数

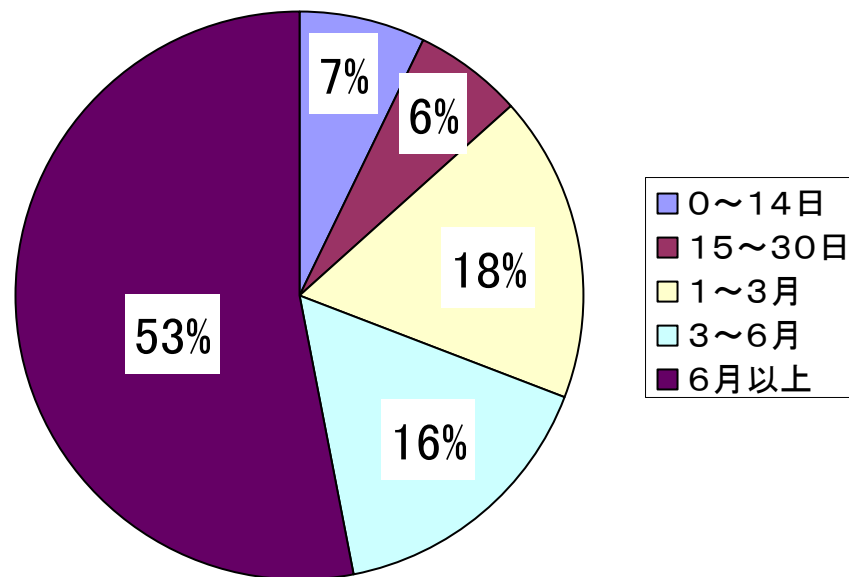
# 転帰が死亡となった推計患者数の割合

一般病床においては、半数以上が1ヶ月以内である

一般病床で、転帰が死亡となった者の  
在院日数別割合



療養病床で、転帰が死亡となった者の  
在院日数別割合

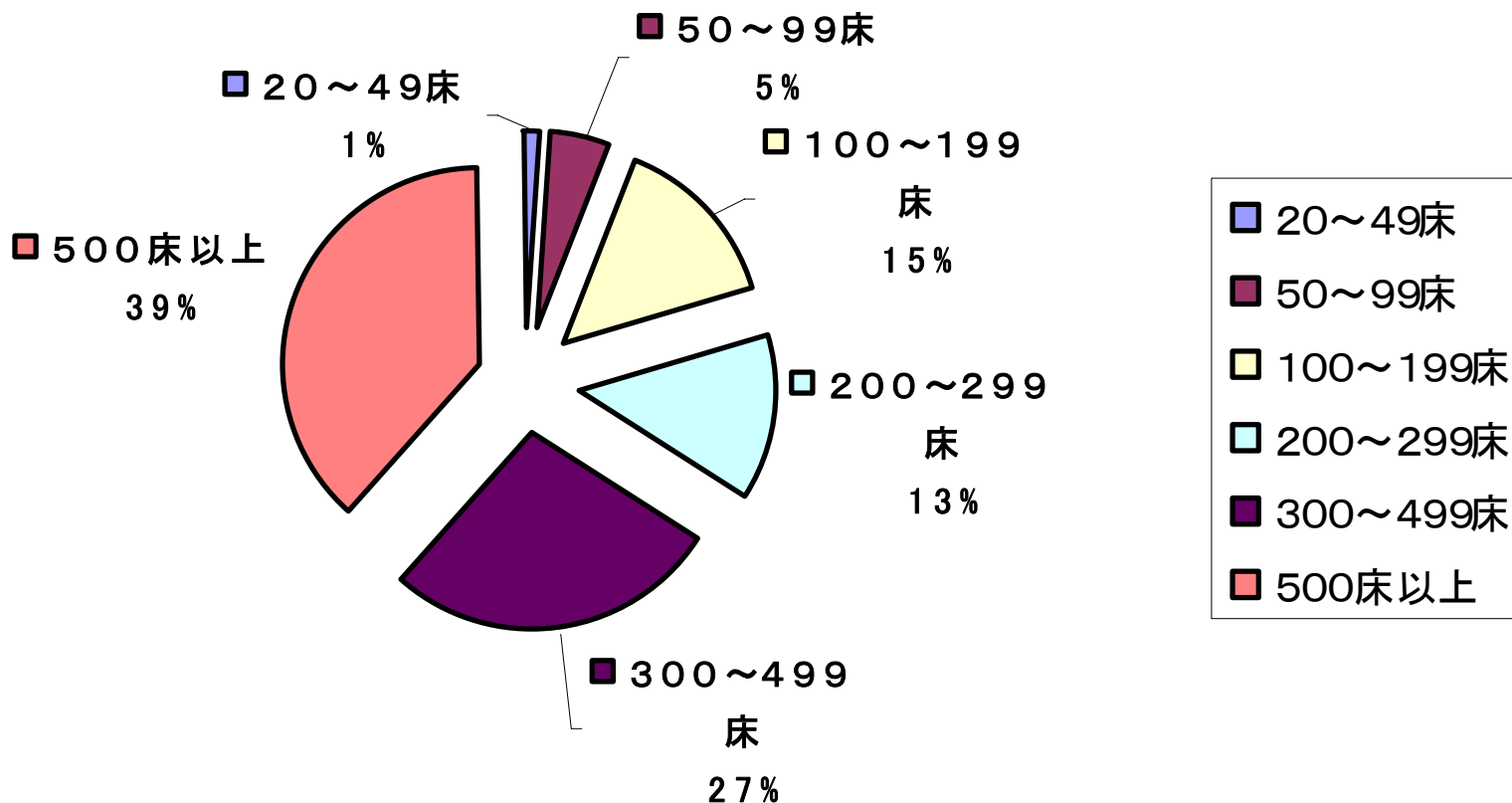


出典) 患者調査 (平成17年)

療養病床においては、6ヶ月以上が半数以上を占める

75歳未満の死亡例では300床以上の大病院で亡くなる傾向が顕著である。

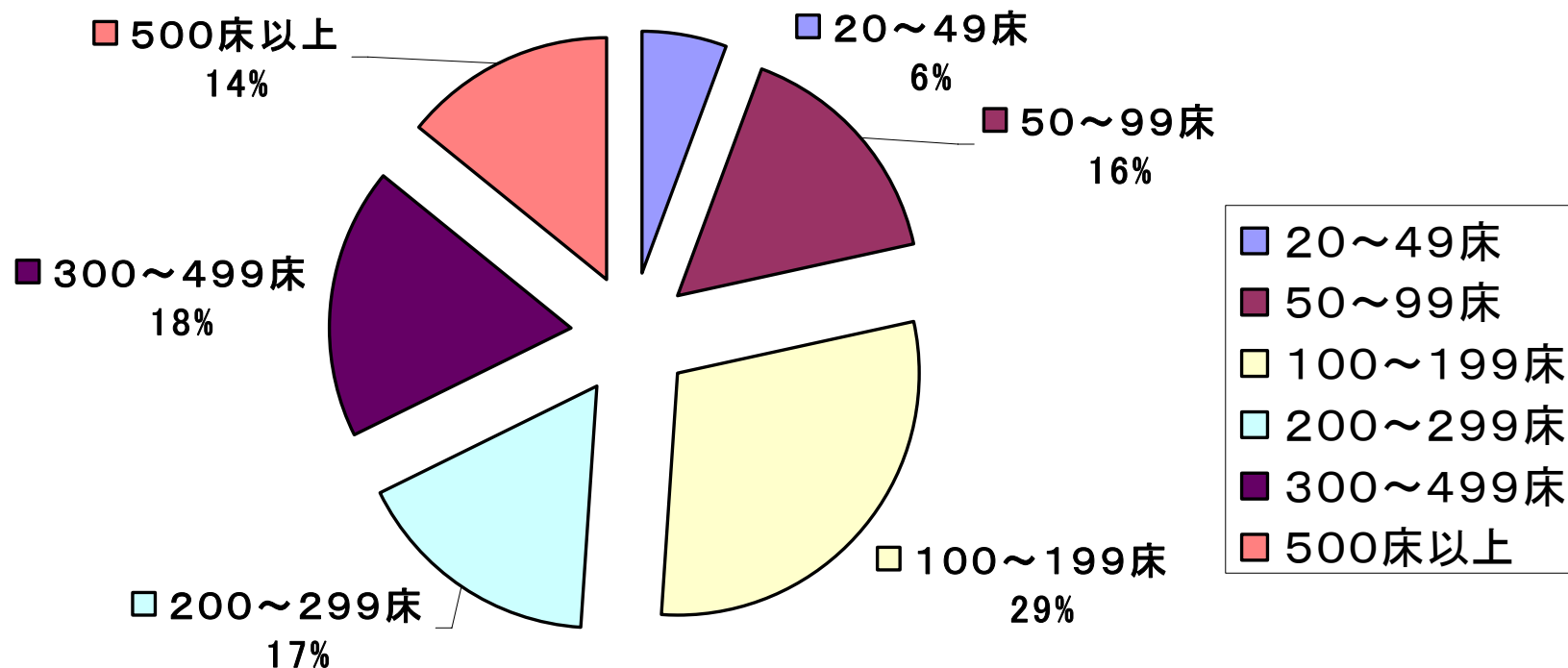
### 病床規模別の入院割合(75歳未満死亡例)



出典:平成16年社会医療診療行為別調査、特別集計をもとに保険局医療課で作成

75歳以上の死亡例では、他の年齢階級に比べて100～199床の病床でなくなっている例が明らかに多い。

病床規模別の入院割合(75歳以上・死亡例)



出典:平成16年社会医療診療行為別調査、特別集計をもとに保険局医療課で作成

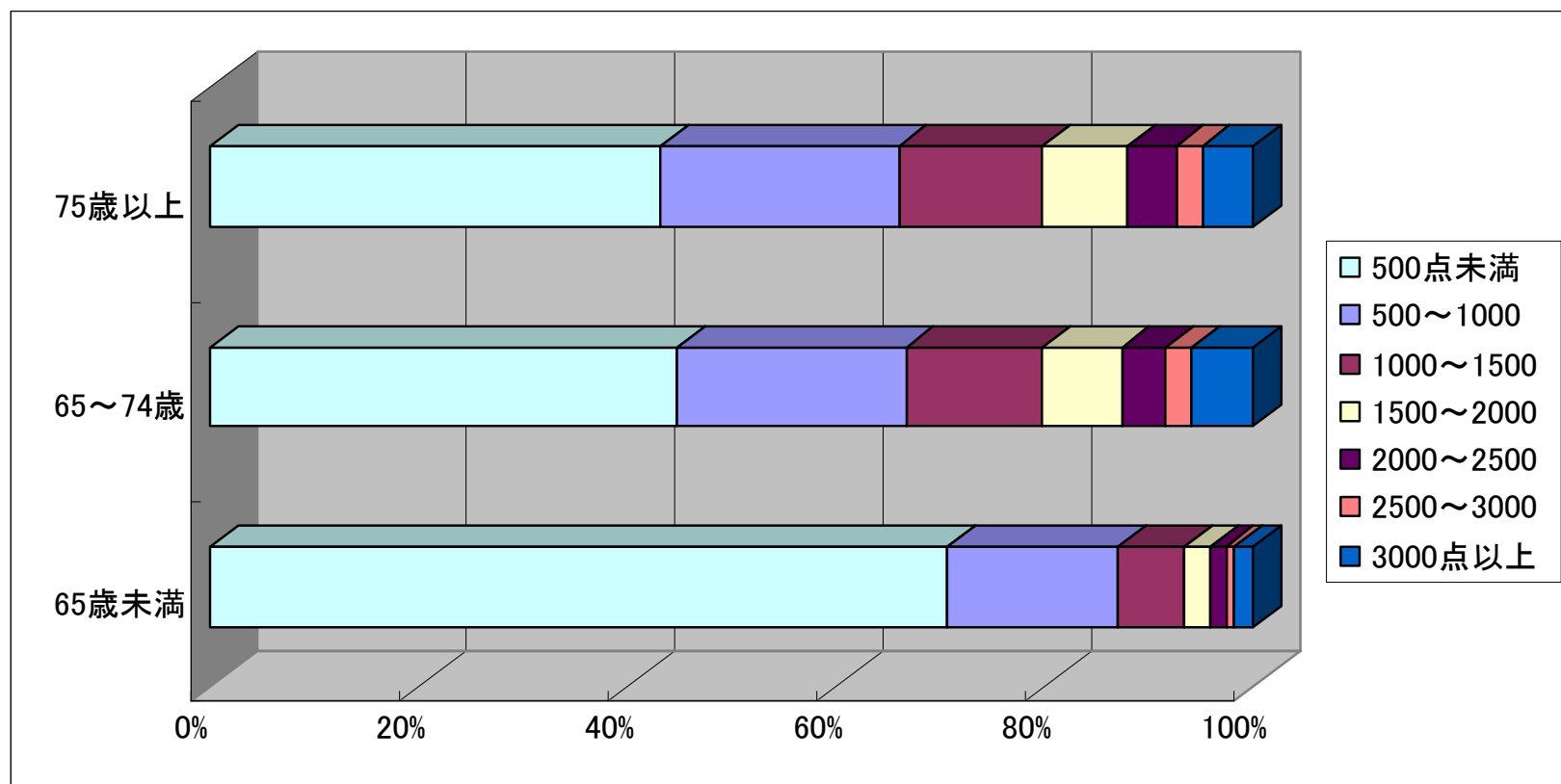




# 薬剤費と薬の種類に関する資料

# 薬剤点数階級別・年齢階級別に比較した薬局調剤件数の割合

65歳未満では、500点未満の件数が約65%を占めるのに対し、65歳以上では、約50%程度となっている。

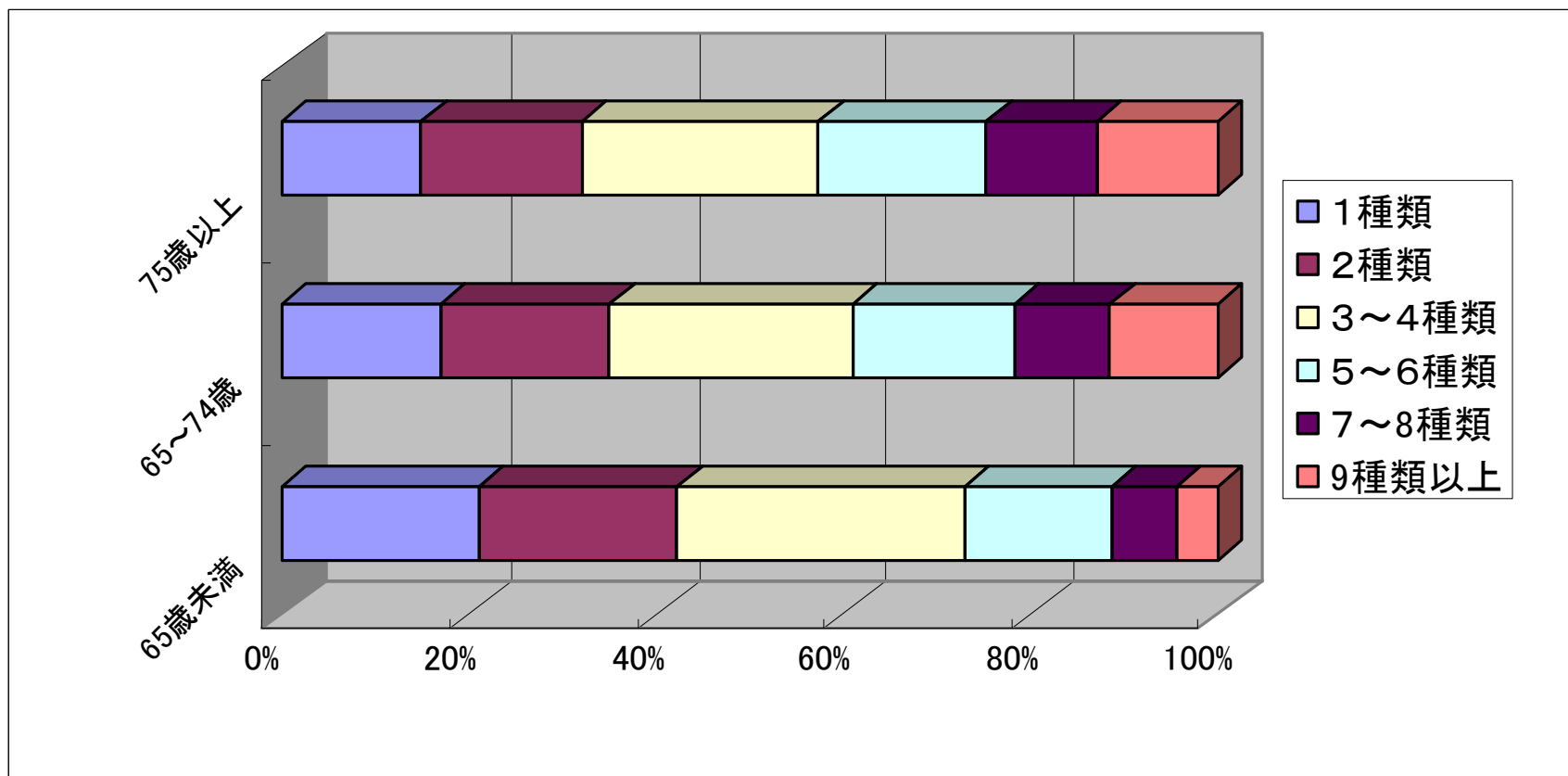


注:「薬剤」の出現する明細書を集計対象とし、薬剤名不明は除外している。

出典)社会医療診療行為別調査(平成17年6月審査分)

# 処方箋における薬剤種類数の年齢階級別の割合

年齢階級が進むにつれ、処方箋における薬剤の種類が増加する傾向にある。



出典) 社会医療診療行為別調査(平成17年6月審査分)